

帝国主義の本拠地を攻撃し全世界の帝国主義者を打倒せよ！　スターリン主義との国際労働闘争を組織し、世界プロレタリア革命—世界プロ独立—共産主義の勝利をめざす！　党と全国委員会の行動を監視する！



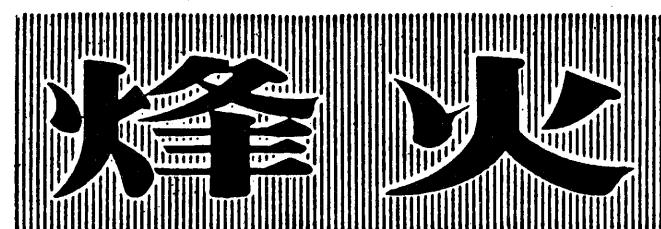
92年党建設基調

第1部 P 2~17

第2部 P 18~27

◆海外からのメッセージ P 17

1992年
1月 1日
第438号
編集発行人 高木一夫
一部 500円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19
明豊ビル401号 大労協内
TEL.(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫



(写真はフィリピンでの反基地)
(国際共同行動・91年9月16日)

92年党建設基調・第一部

国際共産主義運動の 新しい歴史きづ開け

国際共産主義運動はいままた新しい歴史段階に入ろうとしている。ソ連共産党の崩壊を契機として、ソ連では連邦制の解体と資本主義化が急速に進んでいる。共産主義に対するブルジョアジーの大攻勢が全世界で開始され、国際共産主義運動は大きな危機に立たされている。しかし、現在の事態は同時に、国際共産主義運動を長年にわたって支配し、ゆがめ、後退させてきたスターリン主義の破産と終焉をも意味しているのである。スターリン主義の破産を根本的に総括し、その誤りを全面的にまた実践的に克服する革命的主体が国際的な規模で登場するならば、現在の危機は国際共産主義運動の再建の大転機となりうる。そうした可能性を現在の局面は内包している。問われているのは、国際的大反動の嵐のなかでなお原則を堅持してたたかい続けようとする全世界の共産主義者(党)が、自己の抜本的変革と飛躍を実現することであり、また共同の歴史総括と綱領のもとに共産主義者の新しい国際的な結合をおし進めいくことである。

われわれがここに提起する新年号論文(九二年党建設基調)は、こうした新しい時代におけるわが共産主義者同盟(全国委員会)の再出発宣言である。この論文においてわれわれは、ロシア革命以降の国際共産主義運動の意義と誤りの総括に立って、スターリン主義に代わる新しい共産主義運動の創出に向けた現代の共産主義者の進路を提起したいと考える。すべての先進的活動家・労働者・学生諸君が、この九二年党建設基調のもとに結集し、われわれとともに九二年を共産主義運動の革命的転機の年としてたたかいたくことを強く訴える。

★第一章 10月革命の共産主義運動史

共産主義は幻想であった——ソ連・東欧社会主義の相次ぐ崩壊という事態を利用して、金世界のブルジョアジーはこうした思想を人々のあいだに浸透させようとしている。同時にブルジョアジーはロシア革命以降七五年間の共産主義運動のすべては無意味で有害なものであったといふ歴史観を人々に植えつけようとしている。彼らのこうした試みは、大規模な宣伝と、昨日までは共産主義者を自認していた部分の協力によって一定の成功をおさめている。ソ連においてすら現在、「ロシア革命はボルシェビキのクーデ

ターであった」という、かつて誰も相手にしないかったような反共史観が人々をとらえ始めていいだに浸透させようとしている。同時にブルジョアジーはロシア革命以降の国際共産主義運動のすべては無意味で有害なものであったといふ歴史観を人々に植えつけようとしている。彼らのこうした試みは、大規模な宣伝と、昨日までは共産主義者を自認していた部分の協力によって一定の成功をおさめている。ソ連においてすら現在、「ロシア革命はボルシェビキのクーデ

動の建て直しと前進の糧へと転化するために奮闘し続けなければならない。

ロシア革命の意義

ロシア革命は眞の意味で世界史的といえる大事件であった。それはばかり知れない巨大な影響を二〇世紀の政治・経済・社会・文化に与えて、その本当の意義を防衛することは、国際共産主義運動の再建をめざすわれわれの重要な任務である。

■初の社会主义革命

ロシア革命は眞の意味で世界史的といえる大事件であった。それはばかり知れない巨大な影響を二〇世紀の政治・経済・社会・文化に与えて、その本当の意義を防衛することは、国際共産主義運動の再建をめざすわれわれの重要な任務である。

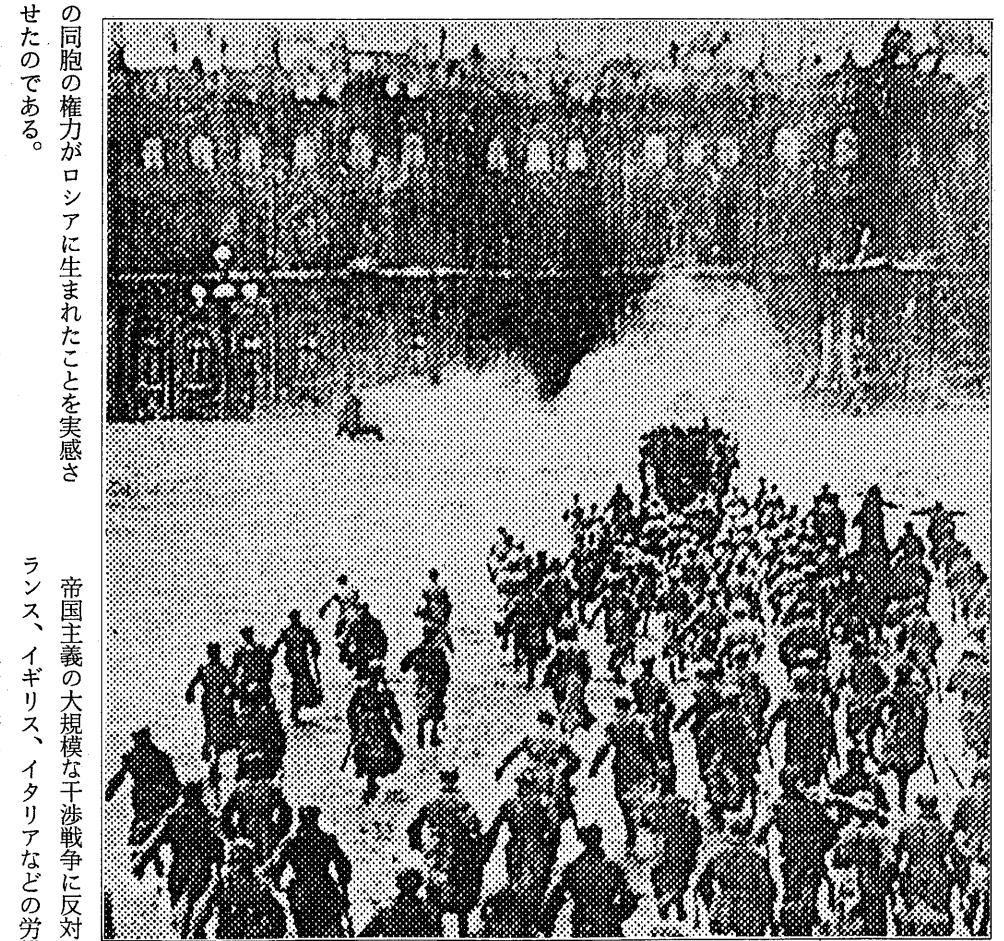
まず何よりもロシア革命は、ブルジョア独裁を打倒し社会主義に進むことを宣言した史上初のプロレタリアートの社会主義革命であったと総括されねばならない。

ロシア革命以前、社会主义はプロレタリアートが目標とし実現すべき理想であった。ロシア革命の成功は社会主義を単なる理念から現実の可能性へと転化した。社会主义は全世界の一人ひとりの労働者人民に直接実感できる存在となった。ロシア革命は全世界の労働者人民を鼓舞し、旧社会との闘争に彼らを続々と立ち上がらせた。この史上はじめての社会主义革命は、当時考えられていたように資本主義が発達したヨーロッパ諸国においてまず成功をおさめるのではなく、まだ資本主義が十分に発達していないロシアで最初に勝利した。この点を理由にして、ロシ

アーヴィングが歴史の発展法則にそわない例外的で普遍性をもたない革命であるとする種々の見解がロシアの内外に古くから存在してきた。しかしロシア革命が帝国主義の時代における最初の新しい段階への鮮明な画期を印した革命であつたという普遍性と歴史的意義を、ロシアにおける資本主義の未発達を根拠に否定することは正しくない。なぜなら「世界史全体の発展が一般的な法則にしたがうことが、発展の独自の形態なり順序なりをあらわす個々の発展の時期をすこしも除外するものではなく、逆に、そういうことを前提としている」（レーニン『わが革命について』一九二三年）からであり、歴史発展の大きな流れのなかでは、どこの国で最初に社会主義革命が成功するかは何ら問題にならないからである。

ではなぜ最初の社会主義革命はヨーロッパではなく、資本主義の発達が不十分で人口の約八割を農民が占めていた農業国ロシアで勝利したのか。第一次帝国主義戦争がまず列強のなかで最弱の資本主義であったロシアの支配者階級の経済的・政治的危機を決定的に促進したこと、国民経済の崩壊と物価高騰・食料不足、生活水準の大幅な低下と窮乏が人民の間に社会の大きな変革を待望する気運をつくりだしたこと、これが革命の客観的原因であった。同時に見落としてはならないのは、ロシアにはプロレタリア階級を代表する強力な前衛党＝ボリシェビキ党が存在し、この党が社会主義革命を意識的に計画し準備し続けていたという革命の主体的因素である。ヨーロッパ諸国にも革命の客観的条件は成熟していたが、革命を指導する強力な革命党は存在せず、旧来の社会主義政党は帝国主義戦争がばつ発すると自国のブルジョアジーの協力者に変節していたのである。

ロシアの地に初めて誕生した社会主義政権は、国内の労働者・農民の広範な支持をえながら、その名にふさわしい理想と政策を掲げて最初の歩みを開始した。一八年一月の第三回全ロシア・ソビエト大会で確認された「労働被搾取人民の権利の宣言」は、革命ロシアを「労働者・兵士・農民代表ソビエト共和国」と規定し、「人が人を搾取することをすべてなくし、社会の階級分裂を完全にとりのぞき、搾取者の反抗を仮借なくおしつぶし、あらゆる国に社会主義的の組織と社会主義の勝利をうちたること」を革命によって成立したソビエト政権の「基本的な任務」とすると宣言した。そしてソビエト政権は、戦争の終結と即時講和、土地の私的所有の廃止、生産の労働者統制、八時間労働制、社会保障制度、男女平等、民族自決権の承認などの政策を次々にうちだしていった。土地の農民への分配にみられるように、そのすべてが必ずしも社会主义的なものではなかつたが、ソビエト政権の掲げた政策は、全世界の労働者人民に自分たち



10月革命は新世界に向かって進軍であった

冬宮を攻撃する
赤軍・17年10月

の同胞の権力がロシアに生まれたことを実感させたのである。

ロシア革命の歴史的意義は次に、この革命の勝利によって世界革命への第一歩が踏みだされたことに求められねばならない。

ロシア革命は全世界の帝国主義ブルジョアジーに対するプロレタリアートの戦闘宣言であり、その勝利は帝国主義ブルジョアジーを震撼させた。二〇世紀のはじめ、帝国主義諸列強はロシアにおいて大きな権益を有していた。ロシアの大きな発電所はみな外国人の所有であった。鉄道はイギリスとフランスの資本で建設された。イギリスはカフカーズなどの石油資源を支配しており、フランスはロシアの最大の債権者であった。しかし彼らがロシア革命を恐れた理由は、こうした彼らの帝国主義的権益が一挙に帳消しになることにあるだけではない。当時最大の帝国主義であったイギリスの首相ロイド・ジョージは、フランスの首相クレマンソーにあてた一九年三月の手紙のなかで、ボリシェビキを帝国主義よばわりしながら次のように述べた。「ボリシェビキ帝国主義はロシア周辺諸国の脅威であるばかりでなく、それは全アジアを、フランスのみならずアメリカをもおびやかしている」。

全世界のブルジョアジーはロシア革命の衝撃が世界的に波及していく、ロシア革命が世界革命の第一步となつて帝国主義の存在そのものを脅かすことになるのをより強く恐怖したのである。一年から二年にかけて、英・仏・米・日をはじめとする帝国主義諸国はロシア革命虐殺のために、ロシア国内の反革命勢力を支援して干渉戦争をくり広げた。一四カ国のブルジョアジーが計一三万人の兵をロシアに派兵して、暴虐のかぎりをつくした。

またロシア革命はアジア等の植民地・従属国での共産主義運動の発展をうながし、同時にこれらの国々の民族解放闘争を世界社会主義革命運動の一角に組み込んだ。すでにアジアには義和団（中国）、東学党（朝鮮）、カティ・ブーナン（フィリピン）などに代表される農民を中心とした反侵略・民族解放を掲げた革命的性格をもつ強力なブルジョア民族運動が存在しており、それらはロシア革命の勝利に励まされて大きな発展をかちとつていった。一八年以降、アフリカ、アラブでは反植民地闘争が、ラテン・アメリカでは反帝闘争が高揚し、アジアでは朝鮮三・一蜂起、中国五・四運動など大規模な民族独立運動がたたかわれていった。そして、これら植民地・従属国の人々においても次々に共産党が誕生していった。

こうしてロシア革命は、ヨーロッパ（資本主義諸国）とアジア等（植民地・従属国）の階級闘争・民族運動を結ぶ役割をない、世界革命

への第一歩を切り開いたのである。

■過渡期世界の誕生

最後に、以上を踏まえてロシア革命の歴史的意義として総括的に確認しておかなければならぬのは、それまでの歴史に例を見なかつたこのまったく新しい革命によって、資本主義から社会主義への世界的過渡期が開始されたということである。マルクスは唯物史観の見地を定式化した『経済学批判・序言』（一八五九年）のなかで次のように述べた。「ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的な形態である」「しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時に、この敵対関係を解決するための物質的な条件をもつくりだつてある。したがつて、この社会構成を最後として人間社会の前史は終わるのである」。ロシア革命はマルクスのいう「人間社会の前史」を終わらせる可能性を人類にはじめて現実に与え、人類を共産主義というまったく新しい歴史段階への入口に立たせたのである。われわれはこの人類前史の止揚に向かう歴史的な一時期を

解説するための物質的な条件をもつくりだつてある。したがつて、この社会構成を最後として人間社会の前史は終わるのである」。ロシア革命はマルクスのいう「人間社会の前史」を終わらせる可能性を人類にはじめて現実に与え、人類を共産主義というまったく新しい歴史段階への入口に立たせたのである。われわれはこの人類前史の止揚に向かう歴史的な一時期を

革命後のレーニン

一九一九年にドイツで武装蜂起が鎮圧され、二〇年になるとヨーロッパ革命の敗北はほぼ確実になつた。ロシアでは内戦による経済の深刻な疲弊を背景にして、各地で革命政権に対する農民反乱が頻発した。内戦と対ソ干渉戦争のかで革命を守りぬいたレーニンとボリシェビキ党は、ロシア革命を世界革命の勝利までもちこたえさせるための「戦略的退却」を余儀なくされた。しかしそれは、おうおうして誤解されているように世界革命の放棄を意味したのでもなく、また単なる「待機」や「息つき」でもなかつた。革命権力はソビエト政権をいかにして防衛し強化するのか、社会主義の経済的な基礎を経済後進国ロシアにおいていかに獲得していくのか、そしていったんは挫折した世界革命への新しい展望をいかに再建していくのか——こうした問題をめぐる苦闘や摸索として、ロシア革命以降の、とりわけロシア革命が「一国的過渡期」を強いられることが確実になつた二年に開始されたネット（新経済政策）以降のレーニン・ボリシェビキ党の全実践はとらえられねばならない。それは現代のわれわれ共産主義者に、革命後の過渡期において前衛党はいかなる任務をになうべきかという、すぐれて今日的な問題に対する豊富な教訓を与え続けている。レーニン・ボリシェビキ党は革命後の社会主

■世界革命の道守る

まず筆頭にあげなければならないのは、世界革命の目的意識的な追求と推進である。レーニン・ボリシェビキ党にあっては世界革命の追求と推進は単にロシア革命を防衛する手段ではなく、ロシア革命を世界革命の勝利までもちこたえさせるための「戦略的退却」を余儀なくされた。しかしそれは、おうおうして誤解されているように世界革命の放棄を意味したのでもなく、また単なる「待機」や「息つき」でもなかつた。革命権力はソビエト政権をいかにして防衛し強化するのか、社会主義の経済的な基礎を経済後進国ロシアにおいていかに獲得していくのか、そしていったんは挫折した世界革命への新しい展望をいかに再建していくのか——こうした問題をめぐる苦闘や摸索として、ロシア

革命建設のための実践において、もつとも何を、どのように重視したのか、このことがいまはつきりさせられなければならない。われわれは彼らの革命後の実践の基軸を以下の諸点としてとらえる。

現実はマルクス主義者の予想と期待を裏切つた。ロシア革命にヨーロッパ革命は続かなかつた。ヨーロッパ革命の敗北後、ロシア革命は孤立し、その結果マルクス的過渡期とは大きく異なる「一国的過渡期」をしかも長期にわたって強引られることになった。ここにロシア革命が抱えた巨大な困難と、その後、スターリン主義が発生する歴史的な根拠が存在したのである。

九一四年一月にはすでに、新しいインターに挫折することによって、当時のマルクス主義者たちが考えていた過渡期とは大きく異なるものとなつた。マルクスはプロレタリア革命は世界的（少なくとも全ヨーロッパ的）に「一挙・同時」に起こることを前提として資本主義から共産主義への移行を構想していた。彼は共産主義への移行にさいしては「プロレタリアートの革命的独裁」という過渡期が必要であるとしたが、プロレタリア革命は世界同時革命として勝利するという予測にもとづいて、そのさいの過渡期は「一時的」「世界的」なものになると考えていた。

「過渡期世界」と呼ぶ。過渡期世界を誕生させたことにこそロシア革命の最大の、そして誰も否定することのできない歴史的意義はあった。

しかしこの「過渡期」は、ヨーロッパ革命が挫折することによって、当時のマルクス主義者たちが考えていた過渡期とは大きく異なるものとなつた。マルクスはプロレタリア革命は世界的（少なくとも全ヨーロッパ的）に「一挙・同時」に起こることを前提として資本主義から共産主義への移行を構想していた。彼は共産主義から共産主義への移行を構想していた。彼は共産主義への移行にさいしては「プロレタリアートの革命的独裁」という過渡期が必要であるとしたが、プロレタリア革命は世界同時革命として勝利するという予測にもとづいて、そのさいの過渡期は「一時的」「世界的」なものになると考えていた。

現実はマルクス主義者の予想と期待を裏切つた。ロシア革命にヨーロッパ革命は続かなかつた。ヨーロッパ革命の敗北後、ロシア革命は孤立し、その結果マルクス的過渡期とは大きく異なる「一国的過渡期」をしかも長期にわたって強引られることになった。ここにロシア革命が抱えた巨大な困難と、その後、スターリン主義が発生する歴史的な根拠が存在したのである。

まず筆頭にあげなければならないのは、世界革命の目的意識的な追求と推進である。レーニン・ボリシェビキ党にあっては世界革命の追求と推進は単にロシア革命を防衛する手段ではなく、ロシア革命を世界革命の勝利までもちこたえさせるための「戦略的退却」を余儀なくされた。しかしそれは、おうおうして誤解され

てゐる。レーニンはコミニテルンを通じてヨーロッパの左派勢力をうち鍛え、アジア等の植民地・従属国の共産主義者を育成し、国際的規模で新しい共産主義運動を創出していくことを展望した。「一国で社会主義が最終的に勝利することは不可能である」（レーニン『労兵農ソビエト第三回全ロシア大会での報告』一九一八年）といふ

他方ではレーニンは、ロシア革命によって誕生したソビエト国家を、ヨーロッパとアジアの諸民族人民が共存しヨーロッパとアジアを結ぶ世界革命の根拠地として構築する構想を抱いていた。レーニンは一九二三年のソ連邦結成に際して、既存のロシア共和国に他の非ロシア民族の共和国を「自治共和国」として加入させるというスターリンの「自治共和国化構想」を激しく批判し、諸民族が同等の権利をもつ連邦制をつくるべきであるという断固たる態度を表明し

ニン・ボリシェビキ党の壮大な構想の具体化であり、その野心的な試みであった。

レーニンは第一次帝国主義戦争が始まった一九一四年一月にはすでに、新しいインターを創設する必要をヨーロッパの共産主義者に訴えていた。大戦が始まると同時に第二インターに属していたドイツ、フランス、オーストリアなど各国の名だたる社会主義政党は、軒並み自国民の戦争政策を支持して社会排外主義に転落し、第二インターは短時間のうちに事実上崩壊してしまつて、レーニンはヨーロッパに散在する左派勢力を統合し、第二インターに代わる革命的な国際組織を結成するために精力をそそいだ。ロシア革命が勝利すると、新しいインター結成の動きは急速に進んだ。ボリシェビキの呼びかけに応えてヨーロッパのみならず、アジア等の共産主義者たちもコミニテルンに結集した。コミニテルン第一回大会にはアジアからも中国人、朝鮮人の共産主義者が参加し、日本からは「ロシア革命を全世界社会革命に転化することは：ひとりロシアの社会主義者の仕事ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣言した。「第三インターは公然たる大衆行動のインター、革命的実現のインター、行動のインターである。社会主義的批判はブルジョア的秩序ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣

言した。「第三インターは公然たる大衆行動のインター、革命的実現のインター、行動のインターである。社会主義的批判はブルジョア的秩序ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣言した。「第三インターは公然たる大衆行動のインター、革命的実現のインター、行動のインターである。社会主義的批判はブルジョア的秩序ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣言

した。「第三インターは公然たる大衆行動のインター、革命的実現のインナー、行動のインナーである。社会主義的批判はブルジョア的秩序ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣言

した。「第三インターは公然たる大衆行動のインナー、革命的実現のインナー、行動のインナーである。社会主義的批判はブルジョア的秩序ではなく、また全世界の社会主義者の仕事である」とする「日本社会主義者の決議」というメッセージが寄せられた。コミニテルンは宣言

た。そしてつくられるべき連邦国家の名称を「ヨーロッパ・アジア・ソビエト共和国連合」として提起したのである。レーニンの病の進行とスターリンによる黙殺によって、この構想は実現されなかつたが、レーニンがここで意図していたものは、徹底した同権を条件にして諸民族をソビエト国家に引きつけ、その着実な拡大によってソビエト国家を世界革命の強力な拠点に建設していくことにあったのである。

■革命後の階級闘争

レーニン・ボリシェビキ党的革命後の実践の基軸として、次にあげなければならないのは「階級闘争の継続」である。革命後の国内の労働者人民に対するレーニン・ボリシェビキ党的政治指導の内容をわれわれは「階級闘争の継続」ととらえる。

社会主義革命はプロレタリアートによる権力奪取をもつていったんは終了する。しかし社会主義の完全な勝利は世界的にしかありえず、それがゆえ革命で権力をにぎったプロレタリアートと前衛党は、社会主義の完全な勝利の日まで、社会主義にいたる過渡期||プロレタリアア独裁期の社会を社会主義に向かって発展させ続けていくことを要求される。それは政治・経済・文化の全領域にわたる不断の闘争と変革、旧社会に属するものと新社会に属するものとの間の闘争を覚が意識的に組織し続けることによってはじめて可能となる。これは革命後の社会における新しい階級闘争であり、プロ独裁においてはその全期間にわたって新しい形態の階級闘争は継続するのである。レーニンは一九一九年六月に次のように述べた。「プロレタリアートの独裁は階級闘争の終了ではなく、新しい形でのその継続である」。そしてこの新しい階級闘争こそが、社会主義への前進のために不可欠の原動力となるのである。

ロシアにおいて革命後の階級闘争はまず、革命権力を転覆しようとするブルジョアジー・地主・反革命勢力に対する闘争として存在した。レーニンが述べたように、この面においては革命後の階級闘争は時には革命前よりもかえつていつそう激しくなったのである。ボリシェビキ党によつてこの時期行われたブルジョアジー・地主・反革命勢力に対する弾圧は、基本的に正当であるものであった。一九一八年から始まる内戦において、ボリシェビキ党は一党制、党内論争の制限、分派の禁止、検閲制の強化、敵対党派の活動の大幅制限などの一連の措置を採用したが、それらはこの時期に必要とされた階級闘争の一つの側面を示すものであった。革命後の階級闘争は、旧支配階級の反抗をうち碎き、搾取制度を打倒するためには組織された。同時にそれは、新しい社会の基礎を築くためにも組織される必要があった。プロレタ

リアート大衆を本当の支配階級に、社会の真の主人公に形成していくための長期にわたるねばり強いたたかいがボリシェビキ党には必要とされた。

ボリシェビキ党が旧支配階級の反抗の鎮圧に基本的に成功した時、革命後の階級闘争は新しい段階に入った。それは主要にロシア革命が旧社会から引きつき、革命後の社会の内部にかかえこんだ諸矛盾との闘争として組織されねばならなかつた。もっとも重視されたものの一つは革命権力内部に発生した官僚主義との闘争であつた。革命によって成立したソビエト政権は、帝政時代の官吏をほとんどそのまま採用せざるをえなかつた。旧国家の職員たちはボルシェビキの政策の実施を妨害し続けていた。レーニンは誕生間もないソビエト国家を「官僚主義的にゆがめられた労働者国家」と呼んだ。また彼は、共産主義者はこの巨大な国家官僚機構を指導しているのではなく、逆に共産主義者が官僚機構に指導されているのだと指摘した。革命によつてソビエト国家というまったく新しいタイプの国家が生まれたが、しかしそれは社会主義国家として十分ではなく、放置しておけば残存する旧社会の諸要素によって征服され、変質してしまふ危険があることを彼は見抜いていた。そしてレーニンは文化の問題に着目した。彼は、官僚主義の弊害を許しているロシアの労働者人民の「文化性の不足」にあり、労働者人民の運れた文化水準がロシアにおいて社会主義を建設していくうえで大きな障害となつてゐるとし、読み書きの能力から規律性、衛生観念、生活態度にいたるまで、労働者人民の文化水準を向上させることが重要性を力説した。晩年レーニンは口述筆記の論文において次のようにさえ主張した。「いまやわが国が完全に社会主義的な国となるためには、われわれにとっては、この文化革命で十分である。だが、われわれにとっては、この文化革命は、純文学的な困難も、物質的な困難もふくめた測りしれない困難に満ちみちているのである」(『協同組合について』一九三三年一月)。

ロシアでは政治革命(権力奪取)と社会革命の後に文化の変革||文化革命が続き、この長期にわたる革命を進めなければ社会主義への前進は不可能だとレーニンは結論づけた。レーニンが到達した結論は深い普遍性をもつてゐる。レーニンは革命ロシアの文化革命において啓蒙・教育・知識の要素を重視したが、いざれにせよその目的は国家の運営や管理に直接参加することのできる能力を労働者人民に獲得させ、官僚主義の弊害を一掃し、労働者人民を名実ともに支配階級として形成することにあり、これは社会主義をめざすどのような革命にも問われる課題であるからである。レーニンが文化革命と総括づけたものは、旧支配階級を基本的に制圧した後の一連の段階において必要とされる階級闘争である。



10月革命一周年の日に演説するレーニン

プロレタリアートの独裁国家、すなわちプロレタリアート人民に対しても徹底して民主主義的であると自認する革命国家は、この文化革命||新しい階級闘争を通じて、真にその形式にふさわしい内実を獲得するのである。

革命後の社会に引きつがれた諸矛盾との闘争としてロシアにおいて重視されたいま一つのものは、大ロシア民族主義との闘争であつた。百以上の異なる民族が存在し、「民族の牢獄」といわれたロシアにおいて社会主義革命が勝利した要因の一つは、ボリシェビキ党が非ロシア民族のあいだに革命に対する支持と共感をつくりだすことにつき、それは革命前、レーニン・ボリシェビキ党が、諸民族のあいだに存在する民族対立を克服しツアーリズム専制に対する単一の階級闘争を組織するため奮闘を続けた成果でもあつた。

ロシア以外の民族の間にもソビエト政権が誕生した。革命後も民族問題の重要性は決して小さくなることはなかつた。革命後の国家はいくつかの共和国からなる連邦制国家として出発するところが確実となつた。レーニン・ボリシェビキ党は革命後の国家が連邦制という形態をとることについては原則的には反対の態度をとつてゐたが、单一の社会主義共和国の実現が現実には不可能になると、「いろいろな民族の労働者が完全に統一されるまでの過渡的形態」として連邦制国家を形成していくことを決定した。しかし連邦制国家は何の指導もなく放置されるならば、各民族のあいだに民族主義を強め、異なる民族の人民の結合ではなく人民を民族ごとに分断していく装置にもなりかねない。こうした危険を知るがゆえに、レーニンは諸民族人民の統一のための党の意識的闘争の重要性、とりわけ抑圧民族である大ロシア民族の民族主義・排外主義との闘争を不可欠の条件にして、大ロシア民族に属する労働者人民が被抑圧民族の信頼

を獲得していくことの重要性を訴え続けた。さらにレーニンの念頭には、国内の少数民族に対するボリシェビキの態度は、世界革命の前進にとって大きな影響を与えるにはおかないこと、とりわけアジアの被抑圧民族の人民が社会主義と世界革命に結集するうえで大きな影響を与えるに違いないという強い問題意識があった。こうして一九二二年の連邦国家結成にさいして、大ロシア民族主義を体現したスターリンらに対する病床からの全精力をふりしぶったレーニンの激しい批判と闘争が行われることになったのである。

■ 社會主義經濟建設

レーニン・ボリシェビキ党の革命後の実跡の基軸として、次にとりあげなければならないのは社会主義経済の建設である。

和的環境のもとで始まったのは、内戦が終結した一九二〇年以降のことである。もともと経済的には後進国であったロシアの経済は、内戦によってきわめて大きな打撃を受けていた。内戦直後のロシアの国民所得は一五年時の三分の一、工業の生産量は戦前の五分の一にすぎず、さらに一七年はじめには三〇〇万人いた工業プロレタリアートは二一年には一二〇万人に減少していった。荒廃から経済を立ち直らせ、同時に社会主義の経済的基礎を築いていく事業は、ボリシェビキ党にとって死活的な課題であった。

用された社会主義経済建設の基本路線は、国家

た。それは一八年から始まる「戦時共産主義」の時代に党内に発生した共産主義へのただちの移行という誤った経済思想に対する総括と批判をもって確立されたのであった。レーニンは革命後のロシアには五つの異なるウクライード＝経

濟制度が存在しており、そのうち国家資本主義の要素を育成していくことが社会主義經濟の建設にとってもっとも重要であるとしたていた（五つのウクライードとは「家父長制的な現物的な農民經濟、小商品生産、私經營的資本主義、國家資本主義、社会主義」）。なぜなら社会主義的經濟要素はいまだ微弱であり、「社会主義

のためのもつとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口」である国家資本主義の強化がロシアにおいてはもつとも現実的な社会主義経済建設の道であると彼は確信していたからである。もちろんレーニンは国家資本主義の育成を何の前提もなく提起したのではない。國家権力がプロレタリアートの手に握られており、この国家が土地を含む主要な生産手段を掌握しているかぎりにおいて、国家資本主義の育成や最新の資本主義的技術・手法の導入は何ら恐れることはない、というのが彼の考え方であった。同時にレーニン

スターの誤り

ソシオロジカルを同一視して外す。

ニンは国家資本主義のうちに社会主義建設にとって積極的に活用できる要素をみいだしていた。プロレタリア国家が制御する国家資本主義は、「物資の生産と分配に対する全人民的な記帳と統制」を可能にするような国家組織をつくりながら

が今日、左右の陣営にまん延している。しかし歴史の事実はまったく正反対である。スターリンこそがレーニン主義を放棄・破壊した張本人である。

そのものであつた

会での報告』（一九一〇年）とした簡潔な主張のうちに示されている。

社会主義は高度に発展した生産力を経済的基礎にするものである。レーニンは誰よりも強くこのことを認識していたが、社会主義建設の展望を生産力の発展それ自身のうちに求めるという生産力主義の誤りには決して陥らなかつた。彼は社会主義経済の建設はソビエト権力の強化や、労働者人民が実際に国の経済を管理し運営していく能力の獲得と結びつけられなければならぬといふ立場を一貫してとつた。それはスターリンからフルシチョフ、ゴルバチョフに至るまで継続した経済主義の立場とは根本的に異なるものであった。

ターリンは各国の共産党に自己の誤った路線を
おしつけ、国際共産主義運動に大損害を与えた。
スターリン主義とは何であったのか、これは
現在まで引き続く共産主義運動内の重大な論争
問題である。われわれはスターリン主義を全面
否定する。われわれはスターリン主義に代わる
新しい共産主義運動の路線が確立されなければ
ならないと考えている。この新しい路線の問題
には次の章でより詳しくふれることにして、こ
こではスターリンとスターリン主義の中心的な
誤りを、歴史的事実を踏まえながら再確認して
おきたい。

国際主義捨て去る

スターリンは一九二二年にロシア共産黨の書記長に就任した。そしてそれ以後、党内で大きな権力をもつようになつていった。レーニンはスターリンの指導者としての個人的資質に大きな危惧を抱き、死の一年前に病床で口述した「大会への手紙」において、スターリンを書記長職から解任することを要求した。しかしこのレーニンの要求はスターリンをはじめとする当時の中央委員会多数派によって無視された。レーニン死後、スターリンは急速に党内での地位を固め、トロツキーをはじめとする反対派の党から追放に乗り出していく。こうして二〇年代末にはスターリンの独裁体制が確立され、スターリン主義が形成されていく基礎ができるがつていった。

しつかりと組織する。こうした党的任務は革命前は権力を奪取するために必要であり、革命後は革命権力を防衛し発展させ、新しい社会を建設していくためにますます不可欠となるのである。

ボリシェビキは革命と内戦の過程において、先進的層を革命の権力としてのソビエト、革命の軍隊としての赤軍に組織することによって、ロシア革命の勝利を確実なものにした。

会主義路線として高めあげ、定式化していく。そして早くも三六年にはソ連で社会主義が勝利したと主張した。わが国ではすでに社会主義は勝利したとスターリンがいった時、ソ連では確かに生産手段の私的所有は廃止され、旧権取階級は基本的に消滅していたが、商品生産も貨幣

も存在し、勤労階級の階級差異もなくなつておらず、また何よりも不当な人民弾圧が続いており、ソ連社会は社会主義と呼ぶにふさわしい内容をもつていなかつた。それは経済的にも政治的にも社会主義にむかう過渡期の社会にすぎないものであつた。

スターリンの一国社会主義路線の基礎には生産力主義の誤りが存在した。つまりスターリン

し、従属させようとする大国主義的な誤りが発生した。

卷之三

も共産主義も実現されると考えていました。三九年のソ連共産党第一回大会でスターリンは次のように述べた。「主要資本主義諸国を経済的に追いこした場合にのみ、…われわれは、共産主

能性をうけとることになるうつ」。たしかにスターリンの指導のもとでも、労働者人民の社会主義建設に対する献身に支えられて経済建設は一定の成功をおさめた。ソ連は一九二八年から始まる二つの五ヵ年計画を通じて、三七年当時には工業生産高の点で世界第二位の地位を獲得した。鉄鋼・石炭・石油の生産高は革命前の水準の三・四倍、電力生産高は一八倍、機械工業生産高は二三倍に達した。この時期、資本主義経済は二九年大恐慌による大きな打撃からいまだ立ち直れないでいた。これとは対照的なソ連経済の一定の成功は、当時の世界に大きな驚きをもって受けとめられた。しかし生産力主義にもとづくスターリンの経済建設は、すでにその最初の段階で深刻な問題をつくりだしていた。一九三〇年の農業集団化の強行がその典型であった。

脳力たる知識階級を協同組合に組織することは、ロシアの社会主義建設において不可欠の事業であった。そのさい共産主義者は農民に対しても強制ではなく説得によって協同組合に加入しようと自発的意願をつくりだすべきであると、生前レーニンは強調し続けた。彼は誰よりも、革命権力に対する農民の支持を重要視していたのである。こうしたレーニン主義的原則を無視して、してスターリンは、当時、生産力発展の最短の道と考えられた重工業建設のために集団化を強制的に推進した。富農や中農は大量の家畜を屠殺して集団化に反抗した。これによって畜産業は巨大な損害をこうむり、それは五〇年代後半まで回復されなかつた。スターリンの強制的農業集団化の結果、多くのゆがみがみがソ連農業と農村社会にもたらされることになつた。

スターリンの一国社会主義路線は必然的にプロレタリア国際主義の放棄につながった。一国で社会主義の最終的な勝利が可能であるならば、国際的な革命運動の前進に期待することも、それを支援することも不必要になるからである。二六年にスターリンはソ連で社会主義が完全に勝利するためには外部からの干渉を排除することが必要であり、そのために他国の革命の勝利が必要であるといったが、これはプロレタリア国際主義にまったく反している。プロレタリア



ナチス・ドイツの外相リッペントロップ
(左) と写真におさまるスター・リン

■弾圧による党破壊

スター・リンのもつとも許しがたい誤り（むしろ階級的犯罪と呼ぶのが適当である）は、反対派への肉体的抹殺を通じてボリシェビキ党的革命的伝統と組織を破壊したことである。

一九二七年にスター・リンはジノビエフ、カーメネフ、トロツキー「合同反対派」との党内闘争に勝利し、さらに一九年にはトロツキーを国外に追放して党内での指導権を確立した。スター・リン個人独裁体制がますます強められるなかで、三四年に起きた政治局員キーロフ暗殺事件（当局者によって仕組まれた疑いが濃い）を契機にして猛烈な弾圧が開始されていった。三六年から三八年にかけていわゆる「人民の敵」に対する大がかりな公開裁判が行われ、共産党中央指導者、地方党委員会幹部、赤軍将校、コミニテルン活動家、外国の党幹部や、さらには非党員の経済官僚、技術者、科学者、文學者、芸術家、宗教家などにいたるまでの大量の白色テロルの嵐が全国に吹き荒れた。ソ連共産党二〇回大会での「フルシチヨフ秘密報告」（五六）によれば、第一回党大会（三四）で選出された中央委員と准中央委員一三九人のうち約七〇%にあたる九八人が三七年から三八年にかけて逮捕され銃殺された。ウクライナ共和国では三四五年には約四五万人いた党員は、三八年には弾圧の結果約一八万人に激減した。軍隊では戦前期に、ほとんどすべての兵团長、師団長、旅団長、ほぼ半数の連隊長、兵团・師団・旅団の政治委員の大半が連隊政治委員の約三分の一が逮捕され、多くの優秀な赤軍将校が弾圧の犠牲になつた。友党関係ではドイツ、フランス、アメリカ、ハンガリー、ポーランド、イラン、メキシコ、ユーゴスラビア、ブルガリア、中国、朝鮮、インドなどソ連にいた多くの外国の共産党的幹部・活動家が迫害をうけ、逮捕され、殺された。これらのはほとんどすべてはでつち上げにもどづく政治弾圧であった。大弾圧が進行していく時期、スター・リンは社会主義の建設が進めば進むほど階級闘争はますます激烈になるという主張をくり返していた。それはレーニンが提起した「プロレタリア独裁下の階級闘争の継続」という理論とは、似て非なるものであった。社会主義を階級のない社会ととらえない点でそれは理論的にはまったくの誤りであり、また自己の階級的犯罪行為を「階級闘争」と合理化しようとする点でまったくのペテンであった。

こうしてスターリンは、非合法時代にさえ存続してゐたボリシェビキ党の論争・批判・決定における民主主義的作風を一掃し、スターリンに対する批判を一切禁止し、党的革命的伝統を破壊とともに、多くの優秀な革命家たちを逮捕・処刑することによって、ボリシェビキ党の党組織そのものに回復不可能な打撃を与えたのである。

ソ連社会では社会主義的民主主義が滅ぼされたとき、ソ連社会では社会主義的民主主義が死滅した。自由な言論が人民から奪われ、党や国家に対する批判は許されなくなり、社会の非政治化が進んだ。生産力主義の立場からラプロレタリア人民を社会主義建設の主体ではなく、その手段ととらえたスターリンには、社会主義的民主主義も人民の自発的な政治参加も

支配の體

第一次帝國主義戦争の過程を通じて、スターリン主義は国際共産主義運動を完全に支配するにいたつた。スターリンとソ連共産党は意のままに各国の党に介入し、誤った指導のもとに各国の党を従属させようとした。コミニンテルンはスターリン主義が各国共産党を支配するための道具に変えられた。スターリンは世界革命の放棄を帝国主義に誓うためにコミニンテルンを解散したが、それは決して国際共産主義運動に対するソ連の支配の意図を放棄するものではなかつた。世界革命を実現するために設立された世界党＝コミニンテルンの解散によって、以降、世界の階級闘争は各国ごとに分断せられ、帝國主義の包囲のなかで孤立を強いられることになつた。

■人民の偉大な成果

スターリン主義による支配と誤った指導にもかかわらず、第二次帝國主義戦争下で世界の階級闘争・革命運動は大きな前進をとげた。ドイツによる対ソ戦争においては、スターリン指導部の「ドイツの侵攻はありえない」という誤った情勢認識や軍幹部の大量肅清が大きく影響してソ連は当初苦戦を強いられ、二千万人の犠牲者を余儀なくされた。しかし最終的にはソ連赤軍と人民はヒトラー侵略軍を打ち破り、ベルリンに進撃してドイツ・ファシズムを打倒した。

中国では三七年から全面化した日本軍の侵略と対決し、共産党が抗日民族統一戦線を指導しながら反帝民族解放社会主義革命の内実をもつ「新民主主義革命」(毛沢東)を進めていた。「スターリンはわれわれの革命と権力獲得に反対であった」と後年、毛沢東はのべたが、国民

■人民の偉大な成果

必需要ではなかつた。党の解体とともに、階級組織は形骸化し始めた。ソビエト、労働組合、各種大衆団体は自立性を失つて上意下達の国家機構化した。レーニンが追求し続けた人民の直接的な国家・經濟の運営への参加の道が完全に閉ざされることによって官僚主義がますます強固になるとともに、他方では党・國家官僚がますます人民から遊離した存在になつていった。これらのからさまざまな特権を享受する特別な階層が形成され始めた。高給、特別の手当と、物資の特別の配給、専用の店舗、別荘、専用の病院などといった一部の人間への特権の保障は、スターリン時代にスタートしたのである。

こうしてスターリンは今日まで続いた「兵管的共産主義」と呼ばれる社会主義とは無縁な閉鎖的ソ連社会のいしづえを築いた。

■スターリンの死後

戦後世界の開始とともに、スターリン主義の誤りは全面開花していった。国際共産主義運動に対するソ連共産党的反階級的な介入・しめつけ・閉い込みはますますあらわになつた。ソ連・東欧ブロックが帝国主義に対抗するソ連の勢力圏として形成されていった。東欧諸国への影響力・支配力を強めるために、スターリン型社会主義が東欧諸国におしつけられた。政治的・経済的にソ連をモデルとした社会が各国につくられ始めた。ハンガリー、ブルガリア、チエコスロバキアなどではソ連と同じような肅清裁判が四〇年代後半から相次いで行われた。スターリン主義型社会主義に反対する動きに対しても、きびしい処置がとられた。ソ連への従属に反抗したユーロスラビアはこのために、コミンフオルム（ソ連・東欧六カ国・仏・伊の党によって四七年に結成）から四八年に追放された。

こうしてますますスターリン主義下のソ連は、自国の利害のために世界の階級闘争と革命運動を従属させていくという態度を強めていった。

■スターリンの死後

一九五三年にスターリンは死んだ。しかしそターリンの死によってスターリン主義は消滅しなかつた。スターリン死後の世界においてもスターリン主義は基本的な点で清算されることなく命を保ち続けた。

スターリンの死から三年後の五六年にソ連共産党第二〇回大会が開催され、ここでフルシチョフによる「スターリン批判」が行われた。神格化された絶大な権威を誇っていたスターリンが、その死後とはいゝ党大会で批判されたことは、大きな衝撃を国内外に与えた。フルシチョフのスターリン批判は主に「個人崇拜批判」であり、スターリンの犯罪行為に対する告発であったが、なぜそのような問題が生まれたかという根拠については不問に付された。フルシチョフがスター リン批判を通じて打ち出したものは「社会主義への多様な道」であり、のちに「全人民の国家」「平和共存」「平和移行」としてまとめられる修正主義の路線であった。スターリン批判を通じてフルシチョフは、ソ連共産党的路線をより右傾化させ、同時に一国社会主義と生産力主義というスターリン主義の根本的誤りについては温存したのである。フルシチョフのスターリン批判がいかに不徹底なものであったかということは、二〇回大会後の五六年一〇月に起きたハンガリー事件にもはつきり示された。ソ連の支配からの解放、政治的自由、生活向上などを掲げたハンガリーの労働者人民に対して、フルシ チョフ体制下のソ連は強権的な政治介入と軍事侵攻をもって応えたのである。スターリン主義の思想と手法は、まったく清算されていないことがはつきりした。

フルシチヨフのスターリン批判にやや遅れて、先進資本主義国の共産党の右翼的変質が急速に進んでいった。七〇年代にユーロコミニュズムとしてまとまっていくこの日和見主義の潮流の旗印は、レーニン主義の否定、世界革命・プロレタリア独裁・暴力革命の否定であり、議会を通じて平和的に権力を握り、社会主義への平和的な移行をめざすというものであった。イタリア共産党がこの代表格であり、フランス、スペイン共産党がこれに続き、日本共産党もこの末席に連なった。このような動向を背景にして、先進資本主義国では共産主義運動の分解と分裂が始まっていた。わが共産主義者同盟もまたこうした状況のなかで、日本共産党の右翼的転落と対決し眞の前衛党建設をめざす革命的左翼としてその第一歩を踏みだしたのであった。

戦後の国際共産主義運動における一大事件は、「国際共産主義運動の大分裂」と中国共産党によつて呼ばれた中ソ論争であった。この論争を左右のスターリン主義者の争いととらえる見解が、新左翼党派の一部には当初からあつた。そ

一九六四年にフルシチヨフはクーデター的方
法によって追放された。代わってブレジネフが
ソ連共産党の新しい書記長として登場する。そ
してブレジネフ体制のもとで、社会の一宗の自
由化を許容したフルシチヨフの「雪どけ政策」
が否定されるとともに、スターリン復権の動き
も進められていった。六五年に対独戦勝二〇周年
記念集会でブレジネフがスターリンを肯定的
に評価する演説をして以降、ソ連ではスターリ
ンの功績をたたえる論文等が社会にあらわれ始
めていく。

完全な最後の勝利をおさめたとし、経済競争によってソ連の生産力がアメリカを追い越せばソ連一国で共産主義社会を実現できるという誤りにまで転落していくのである（ソ連共産党一二回大会綱領・六一年）。ここにはスターリン主義批判は何もない。逆にスターリン主義は右翼的に発展させられたのである。



ソ連共産党20回大会で政治報告するフルシチョフ

次にわれわれはこの章において、スターリン主義の二つの根本的な誤りである一国社会主義線と生産力主義に対する批判を提起する。

成が可能であり、そのために一国生産力をさせることができが、それが党の最重要の任務ならば、世の追求は不必要であり、また他国民の運動との連帯も不必要であり、党は効率的済運営を行つたための指導を国家機構を通じればよく、そこから党の国家機構への解体内人民への階級指導の消滅、国家官僚の特

★第一章 —

次にわれわれはこの章において、スターリン主義の二つの根本的な誤りである一国社会主義路線と生産力主義に対する批判を提起する。

一、國社會主義路線

ロシア革命と勝利を期しかつて、ソシニ、ボリシイ、ビキ党が社会主義建設の勝利のために待望し、始めとしたヨーロッパ革命が敗北し、その現実的展望を喪失した後、レーニンの死後に党的最高指導者となつたスターリンは、「一国のみにおいても社会主義社会の（最終的）建設は可能である」として、共産主義者党的最重要な任務の一つである世界革命の任務を放棄し、ソ連生産力の飛躍的強化によって、先進資本主義国の

このことは、ボリシェビキ党がめざしてきた革命の最終目的からしても、マルクス・レーニン主義の基本的見地からしても反動的な転換を画するものであった。そして、この一国社会主义生産力主義こそがスターリンの最大の誤りであった。なぜなら、一国において社会主义社会の完

「社会主義革命に勝利し、革命権力を世界革命の勝利までもちこたえることを強いられた国で、新たな階級闘争を党はいかに組織するのか」という死活的課題と任務をスターリンたちが放棄したことにおいている。そして、社会主義建設が依拠すべき根本的・基本的力はプロレタリア独裁下の階級闘争にあることをマルクス・レーニン主義の継承・発展の生命線として掲げる。こうした立場を基盤にして、スターリン主義に対する批判を深化していかねばならない。

レーニン・ボリシェビキ党は、貧農を始めとしたロシアの虐げられた人民大衆をその抑圧者たるツアーや地主、ブルジョアジーから解放することを革命の直接の目的しながらも、ここにとどまらず、それとの結合なくしてロシア・プロレタリア人民の眞の解放もない全世界のプ

成が可能であり、そのため一国生産力を発展させることが党の最重要の任務ならば、世界革命の追求は不必要であり、また他国人民の革命運動との連帶も不必要であり、党は効率的な経済運営を行うための指導を国家機構を通じてやればよく、そこから党の国家機構への解体、国内人民への階級指導の消滅、国家官僚の特権階層化と官僚主義の発生という事態が必然的に生じてくるからである。

の復権に寄与した。とりわけ彼らが提起し、六年からプロレタリア文化大革命として開始した「プロ独下の継続革命」は、理論面・実践面での大きな欠陥にもかかわらず、その基本においてレーニン主義を継承しようとするものであった。しかし彼らはソ連批判をスターリン主義批判として貫徹することができず、むしろスター
リンを擁護しながらソ連を批判するという転倒に陥ったのである。

スターリン主義がソ連の国内外でようやく崩壊していくのは、八九年以降の東欧・ソ連の大激動の開始によってであった。それは決して革

労働者人民の嘗々たるたたかいが絶えることなく全世界で継続したからであり、また他方では、スターリン主義に代わる共産主義の路線と運動が生みだされたからである。

スターリン主義の崩壊によつて、その核心であつた一国社会主義と生産主力主義の破産もまた明らかになつた。スターリン主義に代わる新しい路線のもとでの國際共産主義運動の再建は、ただこのスターリン主義の二つの誤りに対する徹底的な批判とを通してのみ可能になるのである。

うした見解は、社会主義とは無縁な存在となつたソ連の現実がこの論争を不可避に発生させたといふことを正しく評価できないという点で誤っている。この論争は、客観的にはスターリン主義による社会主義運動の折衷的構成主義

命的な出来事ではなかつた。スターリン主義の崩壊は、ソ連・東欧諸国の社会主義と共産党の崩壊としてあらわれ、ソ連・東欧の急速な資本主義化として進行したのであつた。

ロレタリアー・被抑圧人民の解放を展望しつつ、世界革命の口火を切る社会主義革命としてロシア革命を領導した。その意味でロシア革命の勝利はレーニン・ボリシェビキ党にとって彼らの革命運動の終わりではなく、始まりであつたといえる。

レーニンは一九一七年以前から、社会主義の最終的勝利は一国では達成されないことをくり返しのべ、それゆえにヨーロッパ諸国の革命との結合を不斷に追求し、世界革命の一環としてロシア革命を位置づけ、一七年以降も「国际的な世界革命の支持がなければ、プロレタリア革命は勝利できない」、「ロシアにおけるプロレタリアートの独裁の基本的任務の一つは先進的な国々、総じてすべての国へ革命をおよぼすため、ロシアで点火された世界社会主义革命のたいまつを全面的に全力をあげて利用すること」であり、ボルシェビキの戦術は「すべての国で革命を発展させ、支持し、めざめさせるために一国で実行できるかぎりのことを実行すること」とあると主張し続けていた。ヨーロッパ革命の展望が失われた後、戦略的後退を余儀なくされ、当面ロシア一国で革命権力を防衛し、社会主義建設の基礎条件を後進的ロシアで獲得していくためにネップ(新経済政策)を導入したときでさえ、「いくつかの大國にプロレタリア革命がおきるまでの経済関係あるいは経済体制の型」上部での集積下部での農民の商業の自由」(『食糧税についてのプラン』)というようにネップと世界革命との関係を明らかにしていた。

一国で社会主義が最終的に勝利することは不可能であるとするレーニンの主張はマルクス主義の正しい見地であり、マルクス・エンゲルスのその点における見解を継承したものである。マルクスの著作『ドイツ・イデオロギー』の「共産主義の物質的前提としての生産諸力の発展」の項で、「共産主義は、経験的には、主要な諸民族が一挙に、かつ同時に遂行することによってのみ可能なので、そのことは生産力の普遍的発展とそれに結びついた世界交通を前提としている」「プロレタリアートの事業である共産主義はただ世界史的なありかたでしかありえない」と表現されているように、社会主義社会(共産主義の低い段階)の建設はその物質的条件として生産力の巨大な成長、高度な発展を前提とするものなのである。

しかしながら、社会主義建設のために世界革命が不可欠であるという理由はそれだけにとどまらない。マルクスの時代の共産主義革命の綱領としての「共産党宣言」は次のように提起している。「ブルジョアジーは世界市場の開拓によって、すべての国の生産と消費を超国家的なものとした」「近代的工業労働、資本の下であって、かれ(ブルジョアジー)からすべての国民的性格をはぎとった」、それゆえ諸国の労

働者が「共同して行動する」ことが、すなわち、ばらばらにではなく全世界の労働者が一致して世界革命を遂行することが「プロレタリアートの解放の第一条件の一つである」、だから「共産主義によって」プロレタリアはひとつの世界を獲得する」。

の農村たる第三世界諸国との対立というように地球的規模でより鋭く表現されるまでに資本主義・帝国主義の成長と発展が進み、ブルジョアジーの力は否応なしに経済的・政治的・文化的に地球的規模に広がっており、帝国主義諸国は生産力は世界のすみずみにまで、その市場を広げ、どの国といえども国際的な経済的結びつきが緊密となっていること、それゆえ一国内的にはそれらの矛盾・対立の止揚は決してなしえないからである。またたとえ一国で社会主義革命が勝利したとしても、勝利のちに社会主義建設のたたかいをおし進めるにあたり、最大の敵であり、執拗で粉碎しつくすのに困難な敵である小ブルジョアジーとの影響力とのたたかいに完全に勝利するためには、全世界のブルジョアジーの打倒が前提として必要になるからである。

トロツキーは「民族的境界内での社会主義のとともに、同時に人民を世界革命のための闘争に広範に組織することを要求される。社会主義の完全な勝利に向けて、一国での革命に勝利した国はプロレタリアー権力は階級闘争の全世界的な結合を推進する先頭に立つ必要があるのである。つけ加えれば、このような階級闘争によって作りかえられた生産力こそが社会主義建設の基礎条件になるのである。

さて、マルクス・レーニン主義の見地からして、スターリン主義の一国社会主義路線がいかに誤っているか、いかに反動的・反プロレタリア的な路線であるのかをみてきたが、ここで、今日においても「一国における社会主義社会の建設がなぜ不可能といえるのか」についてふれておきたい。

社会主義建設の物質的前提条件は巨大に発展した生産力であるが、現在の米・日・独等の帝国主義国は生産力なら、レーニンの時代に想定していた「巨大な生産力」の水準を優に上回るのではないか? それゆえ米・日・独等においてなら一国であっても社会主義社会建設は可能ではないか?

このような疑問には次の点から、どんなに巨大に発展した生産力を有した帝国主義国で社会主義革命が勝利したとしても、やはり一国では社会主義の最終的勝利、社会主義社会の建設は不可能であることに変わりないと答えることができる。



軍事革命委員会議長当時のトロツキー

社会主義社会において主張されるべきブルジョアジーとプロレタリアー、精神労働と肉体労働、都市と農村の矛盾・対立等が今日では一国内ではなく、世界のブルジョアジー、世界の都市たる帝国主義国と世界の被搾取階級、世界

族主義的エネルギーに依拠して壊滅的なロシア軍の経済の再建に人民を動員したスターリンに敗北するのである。

済建設に党の指導を一元化し、世界革命・国際主義に関して当初はお題目として唱えるのみで徐々に形骸化させ、最終的には放棄するに至ったのに対し、トロツキーは世界革命を唱え、スターリンの一国社会主義論に反対したが、世界革命を当時の条件下でいかに準備していくのかについて、また、国内経済建設をいかに階級指導と結びつけて進めていくのかという点での具体的指針を党指導として提起できなかつた。

生産力主義の誤り

以上のへてきたスターリンの一国社会主義路線の基礎には社会主義建設の展望を生産力の発展そのものに求める生産力主義、したがってソ連一国生産力の発展によって、世界経済とは関係なく、他国人民の革命運動とも関係なく、社会主义社会・共産主義社会が建設できるという生産力主義が存在する。

それゆえにわれわれは、この生産力主義がいかに反マルクス・レーニン主義のイデオロギーであるかを明らかにし、それに代わる内容を創造せねばならない。

式的理解、唯物論の機械的適用にもとづいて発生したものである。それは、生産力の発展が歴史を作っていく本源的力であるとする歴史観としての生産力主義と、生産力の発展により一国における社会主義社会建設は可能であるという実践路線としての生産力主義の二つに内容上整理できる。前者に対してもわれわれは、「階級社会が発生して以来すべてこれまでの歴史は階級闘争の歴史であった」というマルクス主義・唯物史観の基本テーマの一つを否定し、階級闘争が歴史において果たす役割を見ようぜず、階級闘争こそが歴史を作っていく原動力であることを原則的に否定する機械論的な歴史観として批判するし、後者に対してはこの明白な誤りに、プロレタリア独裁下の階級闘争と世界革命の決定的意義を対置するものである。

一高度に發展した生産力は「一つの絶対的に必要な実践的前提」（『ドイツ・イデオロギー』）である。しかし、生産力の発展それ自身が、社会主義革命勝利後のプロレタリア独裁国家を社会主義社会に導けるわけではない。もしそうであるなら、今日巨大な生産力を有するにいたつた米・日・独等の帝国主義は自動的に社会主義社会に成長することだろう。

レーニンにあってはネットを導入したとき、いつたん挫折した世界革命の新たな展望をいかに切り開いていくのかという点と、社会主義の経済的基礎をいかに後進ロシアで獲得していくのかという点を、国内人民への階級指導の問題、新たなる階級闘争をいかに組織していくのかという問題と結びつけて指導指針を提起したが、スターリンやトロツキーはそのような弁証法的思考をもって問題を措定できず、また、何よりもプロレタリア独裁下の階級闘争の組織化の問題として措定できなかつた点に決定的誤りがあるのである。

率的に経済を運営する国家機構、人民への動員強制力としての国家機構があればよく、党の任務は国家の任務と別個には必要でなくなり、党は国家機構へと解体され、党指導部は国家官僚組織としての国家機構ではなく階級組織としての労働組合やソビエトに対する指導が、党的特権から階級指導が、したがって国家運営の極には中国の文化大革命当時の「紅か専か」の論争があった。中国における経済建設を進めるのに、「紅」＝共産主義思想をもつてするのか、「専」＝専門技術をもつてするのか、という論争である。毛沢東はそれよりずっと以前にスターリンとソ連共産党を批判して、「紅をもつて専を導くことだ。スターリンの次の二つのスローガンには弁証法が欠けている。すなわち、技術がすべてを決定するというが、政治はどうなのだ？幹部がすべてを決定するというが、大衆はどうなのだ？レーニンはすばらしいことを言っている。ソビエト+電化が共産主義なのだと」（『一九五八年五月の講和』）と主張していたが、結局一国社会主義路線批判も含めたスターリン主義そのものの根本的・路線的批判として展開しえなかつたがゆえに、批判的觀点そのものがきわめて不徹底なものとなり、「黒猫でも白猫でもネズミをとる猫は良い猫だ」の鄧小平のような生産力主義者を制するに、觀念論者の典型たる悪名高き四人組を輩出することになつたのである。四人組は「思想さえ真っ赤ならば、すべてが解決する」として、問われている一国における経済建設の課題に具体的に対応せず、当時の中国の経済に壊滅的なまでの打撃を与えたのである。この四人組のさらに極限化された表現が、具体的諸条件を一切無視して、商品経済の即時廃止や強制力による農村と都市の差の解消等に示される共産主義へのすぐさまの突撃をめざしたカンボジアのポル・ポト政治であった。

われわれは強いられた条件下での一国における経済建設の課題については、やはり「紅か専か？」という二元的な問題の設定ではなく、マルクス・レーニン主義で武装した共産主義者による、國際共産主義運動の戦略的展望も踏まえたうえでの科学的・具体的な当面の経済建設の計画と実践を、階級指導の任務と結びつけておし進めていく道を選択せねばならない。その点で、同様の課題に歴史上最初に直面したレーニンのネットから学ばねばならない。ネットは直接の社会主義建設を試みた「戦時共産主義」の時代の誤りを総括して提起された方針だった。ロシア革命を圧殺しようとの外部からの敵、帝政権は、一九一〇年の農業不作も手伝って農民をはじめとした国内の政治的動搖を受け、帝

帝国主義諸国の共産党は、一九五〇年代後半から若干の時期的なずれはあれ、国際共産主義運動における右翼日和見主義潮流として公然と登場してきた。イタリア共産党、フランス共産党、イギリス共産党そして日本共産党などがその代表であった。これらの諸党に共通していた

帝国主義諸国の党

ソ連・東欧におけるスターリン主義の崩壊は、ついにソ連共産党の解散、ソ連邦の解体という事態にまでいきついた。今こそマルクス・レーニン主義に立脚し、スターリン主義の根本的批判にもとづく国際共産主義運動の再建の大道が、現在の歴史的流動のただ中にうち立てられねばならない。この時、ソ連・東欧での現在の事態に対しても、全世界の共産党はどのような態度をとろうとしているのか。この章では、世界のいくつかの共産党の態度をとりあげ、われわれからの批判と評価を明らかにしていきたい。

いることははつきりしている。「労働者と農民の協定、一定の関係」とは疲労困憊している大衆に経済的な恩恵を与え、「プロレタリアートがその手中に大工業とその生産物を握っており、…農民に生活の資を与えて、資本主義制度と比べての違いが目に見え、身に感じられるような仕方で農民の状態を樂にしてやっているような関係」であり、そういう関係だけが「正常な社会主義社会の基礎をつくりだすであろう」、そして「前代未聞の困難をなめている幾千万人の分散した小農民を統合することのできる勢力」

いわば国内の「敵」＝ロシア革命権力解体の要素としての小ブル的・無政府主義的な自然発生性とのたたかいの必要性に迫られた。レーニンはネップを導入するにあたり、「工業労働者が少数で、小農民が圧倒的多数を占めるロシアのような国では、社会主义革命は二つの条件がある場合にだけ、最後の成功をおさめることができ。第一は、一つまたは若干の先進国の社会主义革命が時機を失せずにこれを支持するという条件。第二の条件は、自己の独裁を実現しているプロレタリアートと農民人口の大多数との協定である」（『ロシア共産党（ボ）一回大會』）として、その目的を明らかにしている。ここでは、第一と第二の条件の関係は明らかにしてある。

搾取者に対抗して彼らを経済的および政治的に統合する能力をもつてゐる勢力は、自覚したプロレタリアートのほかはない」(同前)とのべられてゐるよう、ネットはレーニンにとって何よりも当時の条件下での階級指導の問題として提起されたことを知らねばならない。

なければ、高度に組織された大工業がなければ、一般に社会主義は問題にもなりえない」「われわれは公然と資本主義を新しくつくり出す。プロレタリア国家における国家資本主義である」（『コミニンテルン三回大会』）とも主張しているが、これは生産力を一定程度発展させねば社会主義建設にとって話にならないと同時に、それによって高度に組織された大量の労働者群、プロレタリアートを創出していくことを想定してのものなのであった。

そして、レーニン主義を継承し発展させようとするのなら、この大量に創出されたプロレタリアートをプロ独立権力を握りしめたという新たな条件下での新たな階級闘争の担い手として階級形成していくという点にネップ開始以降のボリシェビキ党的中心課題が設定されたはずであつた。しかし、こうした革命の決定的な課題をスターリンは生産力主義にもとづいて放棄してしまつたのであつた。

ソ連共産黨の解散という歴史的事態に対して、これらの帝国主義国共産黨の態度にはいくつかの違いがある。しかし共通していることは、スターリン主義の破産をマルクス・レーニン主義の立場から総括するのではなく、自らが公然・隠然と社会民主主義の党へと転向してきたことが正しかったと主張していることにある。そしてソ連・東欧の事態が、次の議会選挙での議席の減少につながらないように必死にふりかかる火の粉から身を避けようとしていることである。これら諸党は、いかなる意味においても国际共産主義運動の再建に向けた連帯と同志的批判の対象ではない。國際共産主義運動再建の途上において全世界の原則的な共産主義党・共産主義者がなすべきことは、これらの諸党への容赦ない批判と党派闘争を組織し、これらの諸党の影響下から先進的労働者人民を奪い返していくことがある。以下、簡単に帝国主義各国の共産党のそれぞれへの批判を提起する。

■転向する欧洲の党

イタリア共産党は、帝国主義国共産党の中でも最も早くからレーニン主義を公然と否定し、構造改革路線を唱えて社会民主主義へと転落した党であった。イタリア共産党は、東欧諸国にスターリン主義の支配が次々と崩壊するや、共産党を名乗ることすら放棄して昨九一年二月の第一〇回党大会で左翼民主党と改称してしまった。

左翼民主党は、ソ連共産党の解散に対し、ブルジョアジーと口をそろえて共産主義の崩壊

のは、ソ連における社会主义と自らがめざす社会主義とは違うと言い、その実はマルクス・レーニン主義の継承すべき革命的原則をことごとくうち捨てて、社会民主主義の党へと転落していくことにあった。これらの諸党は、レーニン主義を公然と否定し、世界革命・プロレタリア独裁・暴力革命を否定した。そして現在では、自國帝国主義との闘争を掲げるのではなく、ますます資本主義の改良を自らの任務とする改良主義に陥り、自国民衆を国際主義へと組織するのではなく、ますます排外主義に汚染されていている。

帝国主義諸国の共産党が共通してこのような右翼的転落をとげていったのは、決して偶然ではない。帝国主義諸国では、第三世界諸国からの過酷な収奪による膨大な超過利潤が集積し、おしなべて階級対立が潜在化していく。そして、帝国主義諸国の人民は世界的に見れば豊かな生活の保守を望み、根本的な社会変革を望まなくなつていった。帝国主義諸国の共産党は、このような自國人民の現状に拝跪し、共産主義前衛党たることを自ら放棄する道を選択してき

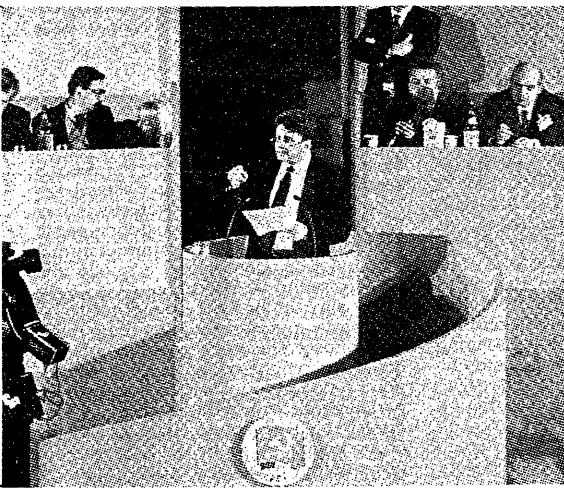
で抑圧的な政治体制の構築をもたらしたからであった。まさに、ここに共産主義の眞の崩壊の原因がある」（同上）と。こうして左翼民主党は、自分たちがいち早く共産主義を放棄して左翼民主党を結成したことが正しかったのだと言ふ。このような左翼民主党の声明にはソ連・東欧における資本主義の復活への一片の批判も、帝国主義への一片の批判も存在していない。左翼民主党は、ますますイタリア帝国主義の擁護者へと転落していく、階級闘争の発展のためには打倒される以外にない存在となっていくであ

ろう。

このようなイタリア共産党の後を大急ぎで追つていったのが、イギリス共産党である。イギリス共産党は、ソ連のクーデターが失敗するや、民主主義勢力の勝利と無条件で賛美した。そして一〇月に開催された党大会では、共産党そのものの解散を決定するに至ったのである。

フランス共産党の態度は、表面的にはイタリア左翼民主党やイギリス共産党とは異なっている。フランス共産党は、「クーデターとその結果はソ連邦の分裂と社会主義の廃止の支持者たちを強力な地位におしあげた」と嘆き、「どれほど困難ではあっても、ミハイル・ゴルバチョフがペレストロイカにふり当てていた任務すべての潜在力を發揮させるために民主主義によって社会主義を変革する」を首尾よく遂行することはできた、われわれは今まで確信している」（九一年八月二七日・フランス共産党政治局声明）とゴルバチョフによる社会主義の変革への期待をなお表明している。

しかし、フランス共産党もまた決して共産主義を防衛しようとしているのではなく、ましてやマルクス・レーニン主義の側からスターリン主義の破壊を総括しようとしているのではない。フランス共産党は、一九七六年の党大会において、他の帝国主義諸国の共産党と足並みをそろえてマルクス・レーニン主義の革命的原則を公然と放棄し、「フランス風の社会主義」をめざすと宣言した。この「フランス風の社会主義」について、フランスの国民、青年は多くの要求、願望、今日では束縛されている能力などを持っている。わが国が社会生活のあらゆる分野を民主化し、そのすべての力を活用できるようにすること、それをわれわれはフランス風の社会主義と呼んでいる」（九一年八月一九日・フランス共産党政治局声明）と。このような「フランス風の社会主義」とは、共産主義の低い段階としての社会主義とは縁もゆかりもないものであり、資本



イタリア共産党の共産主義放棄を決定づけた第一回党大会（90年3月）

主義の部分的な改良を意味しているに過ぎない。フランス共産党が望んでいたことは、ブルジョアジーがソ連の社会主義の実態をフランス共産党への非難に利用できなくなることであり、そのためには「フランス風の社会主義」と似たものへとソ連の社会主義が変質してくれることだつたのである。このようなフランス共産党もまた、原則的な共産主義者にとって、容赦ない批判と党派闘争の対象以外ではない。

日本共産党は、ソ連共産党の解散に対する「大国主義・霸權主義の歴史的巨悪の党的終焉を歓迎する」という中央委員会常任幹部会声明（一九九一年九月一日）を公表した。この声明の主内容は、要約すれば次のものであった。

■ス夕批判なき日共

①ソ連共産党の解体は、科学的社会主義の立場とは縁もゆかりもない大国主義・霸權主義と国内における官僚主義・民主主義抑圧の必然的な結果であった。科学的社会主義の学説・運動は、ソ連・東欧の事態によっていささかも否定されるべきものではない。②ソ連共産党が解体することは、世界の共産主義運動の前途にとって、大国主義・霸權主義とそれへの追従の誤りから解放されて、大局的には新しい発展をかちとる条件と可能性をきりひらく歴史的画期となりうるものである。③ソ連共産党が犯した誤りは、この国が資本主義的発展の遅れた段階から社会主義の道に踏みださざるをえなかつたことと結びついたものであった。しかし、この誤りは不可避であつたわけではなく、レーニンの指導のもとで体制としての社会主義の先駆性を示した画期的な事業の世界史的意義は清算主義的に否定されるべきではない。④発達した資本主義である日本における革命の事業は、高度な生産力の発展という意味でも、民主主義の一定の蓄積という意味でも、人類史の新しい未来をひらくばかりしれない可能性をもつた事業である。この日本共産党の声明は、西欧諸国の中産党・旧共産党が共産主義の破産というブルジョアジーの宣伝に屈し、共産主義を放棄して社会民主主義の党へと転向したことが正しかつたといふ立場に立っていることとくらべて大きく異なるものであった。日本共産党がソ連共産党の解体は社会主義・共産主義の破産ではないという態度をとり、ソ連共産党の解体は國際共産主義運動の新しい発展の条件をつくりだすものだという態度をとっていることは、他の帝国主義諸国の中産党・旧共産党の態度とくらべれば擁護されるべきものである。

しかしにもかかわらず、日本共産党は国际共産主義運動の革命的再生にとってはいささかも積極的役割をはたす党ではなく、むしろ阻害物となるものである。ソ連共産党の解散やソ連・東欧諸国における社会主義の崩壊という事態は、

ただこの事態をスターリン主義の破産として厳格に総括し、マルクス・レーニン主義に立脚した新たな國際共産主義運動の創建に結びつけられてこそ、はじめて國際共産主義運動の革命的再生へと転化していくことができるからである。この立場から、日本共産党に対しても次のように根本的批判が加えられねばならない。

日本共産党はあたかもレーニンの闘争と十月革命が実行したいくつもの政策について積極に評価しようとはする。しかし、武装蜂起をもつて世界で最初のプロレタリア独裁権力を樹立したこと、第三インター＝世界党を創建して世界革命へと進せんとしたこと、労働者人民の革命の組織として赤軍とソビエトを建設して継続する階級闘争を組織しようとしたことなど、ブルジョアジーが憎悪してやまないレーニンの闘争と十月革命の歴史的意義のすべてを黙殺してきたのである。そして、西欧の帝国主義共産党・旧共産党とともに、世界革命・プロ独・暴力革命を否定するという立場をとってきたのである。このような日本共産党には、ソ連・東欧における社会主義の崩壊をレーニン主義から逸脱したスターリン主義の破産として根本的に総括することなどできようはずもない。ソ連・東欧における社会主義の崩壊は、スターリン主義の一国社会主義路線と生産力主義の誤りの帰結である。日本共産党が批判してやまないソ連共産党の「大国主義・霸權主義」もまた、他国における階級闘争と革命運動をソ連一国の利益に従属させれる一国社会主義路線から発生したものである。日本共産党はスターリン主義への根本的な批判を行うことができず、ソ連共産党のさまざまな誤りの原因をロシアにおける資本主義の発展の遅れやスターリンとその後継者の個人的資質に求めるという立場に陥っている。このような立場からは、スターリン主義との後継者の個人的資質に求めるという立場に陥っている。このようないくつかの立場から、再建されるべき國際共産主義運動の新たな原則を確立していくことなどできようはずもない。最後に、われわれは日本共産党の反プロレタリア國際主義を厳しく批判する。ここにこそ、日本共産党がこんにちの國際共産主義運動の中において果たしている最も否定的な位置がはつきりと示されているからである。彼らは、プロレタリア國際主義の根幹である世界革命と世界党建設を否定するだけではなく、巨大な困難に直面する第三世界の反帝民族解放・社会主義革命への國際連帯へとわが国と世界の人民を全力で立ちあがらせることを否定する。とりわけ、アジア・第三世界に君臨せんとする帝国主義本国の党として、この反國際主義は犯罪的ですらある。彼らは、日本資本主義を帝国主義としてとらえることを拒否し、



昨年6月に開かれたベトナム共産党第7回大会

現在の日本の経済的繁栄が第三世界人民からの過酷な収奪の上に築かれていることとを拒否する。こうして、日本共産党は日本人民をその国際的責務たるアジア・第三世界人民への国際主義連帯へといざなうことを否定し、日帝との正面戦へと決起させていくことを否定し、排外主義へと屈伏していくのである。われわれは、固く確信する。国際共産主義運動の再建のために、全世界の革命的同志たちとともに新たな长征に進撃しうる党は、そしてなお原則を堅持してたたかい続けようとする第三世界の同志たちから共産主義者としての信赖をかちえることができる党は、国际主義の旗を高く掲げる党だけである。

八月のソ連でのクーデターの失敗、共産党的解散、そしてこれに引き続くソ連邦の解体など、「脱社会主義」という一連の事態は、社会主義を標榜してきた諸国の多くの党に激しい衝撃を与えたし今も与え続けている。

すでにこれに先立つ東欧の激動の中で、アルバニア、ルーマニアを除いて東欧のすべての旧共産党が選挙で少数派に転落した。そして東欧のすべての党が共産主義を名目上も放棄し、社会主義路線に転換した。

残るアジア等の社会主义諸国は、ソ連の政変に対して多くが公式的には「基本的にはソ連内部の問題」として態度をとりつも多大な影響を受け、それへの対応を進めている。ソ連の政変後、国際帝国主義の包囲と圧力が一段と強化される中で、彼らは一方では社会主义国間の協力関係の強化によって事態を乗り切ろうとしている。昨年一〇月には北朝鮮の金日成が中国を訪問し、経済協力や外交問題について中国と協議した。また一一月にはベトナム首脳が中国を訪問し、経済協力や外交問題について中国と協議した。

社会主义諸国の党

中国共産党はソ連の一連の事態について公式には論評を加えていない。しかしこの間の報道から推測すれば指導部は大要以下のよう見解を持っていると考えられる。第一に、ゴルバチョフが社会主義を崩壊させてきた。クーデター派はこれに加担してきたが、ぎりぎりの所で社会主義の制度を守ろうとした。第二に、経済建設が失敗すれば社会主義は危機に陥る。党の指導がなければ社会主義は崩壊する。したがって、中国では経済改革、経済開放を進めつつブルジョア自由化に反対し、社会主義建設を堅持する。

中国共産党現指導部は、ゴルバチョフが政治改革を経済改革に先行させたことで政治的な不安定さを招き、欧米列強に乘じられて社会主義を覆されるとみている。このような見解は「政治改革・経済改革」がどのような路線で推進されるのかという根本問題をまったく見ずには、技術的な総括にすりかえているという点で誤っている。ソ連・東欧の社会主義建設の敗北は、何よりもスターリン主義路線の誤りに求めらねばならない。そしてマルクス・レーニン主義によるこれへの根本批判をもつて社会主義建設の路線を再建することなしに一步も前進はありえないものである。

こうした中国共産党の対応は、中国現指導部の文革以降の社会主義建設路線（中国の特色をもつ社会主義）に基づくものである。

中国共産党現指導部はすでに一〇年以上にわたって、社会主義建設路線の中軸を経済建設＝経済改革と市場開放においてきた。それは生産手段と土地の公有、そして計画経済を原則としつつ私有的要素・市場的要素を混入し、また経済特別区を設けて外資を導入し、生産の増大と所得の増大をはかり、経済発展を実現しようとするものであった。

この「改革・開放」といわれる路線は八七年の第一回党大会で「社会主義の初級段階」論として論拠つけられたものである。そこにおいて、資本主義が達成した工業化・現代化を飛び越えて社会主義に入った中国の社会主義はいまだその初級段階にあると規定された。そしてこの社会主義初級段階的主要任務は、増大する人民の物質的文化的要件に応える生産力の発展、

富み栄えた民主と文明を持った社会主义の国家建設にあるとされた。

この路線のもとで八九年の天安門事件に至る矛盾が蓄積されていった。経済改革が進む中で貧富の差も広がり、インフレ、失業が表面化し、社会主義建設を進めていくという困難な一時代がいま到来した。

■中国共産党の限界

中国共産党は「後進」諸国での社会主義建設は、帝国主義の収奪の結果から過酷な物理的条件下で出発することを強いた。ここにおいてはさまざまな迂回路の利用、帝国主義との妥協、資本主義的手法の利用は不可避である。この経済建設におけるさまざまな迂回路の利用は、またそこにおける小ブル、ブル階級の発生を不可避とする。党はプロレタリアート大衆を指導してこれとたかわしめ、社会主義の担い手として彼らを階級形成し続けるなければならない。しかし中国の現在の「改革・開放」路線は、こうした党の基本任務をはじめから欠落させている。ちなみにロシアで内戦後、国内生産力の復興と革命政権の安定化をはかるために打ち出されたレーニンのネップは、これが社会主義の建設にむけた帝国主義との妥協であることをプロレタリアートに訴え、かつロシアのプロレタリアートが世界革命にむけて貢献すべきこと、発生する小ブル、ブルに対する闘争を通じて人民を社会主義へ牽引することを鮮明にしていた。中国の「改革・開放」路線はレーニンのネップとは断じて同じものではない。

ソ連・東欧の事態は中国の指導部に自らの経済改革路線に自信を持たせ、政治改革への警戒心を強めさせた。彼らは当面は思想的引きしめを強化すると結論づけている。しかし、これは社会主義建設の敗北を突破するどころか逆に矛

この最後の章でわれわれは、現代の共産主義者・革命的プロレタリアートが共産主義運動の再建に向けて共同で担わねばならないもつとも重要な国際的任務を提起する。

われわれはいま何よりもまず一国的任務ではなく、国際的任務をこそ問題にせねばならない。

現在、各国のブルジョアジーは激しい経済的対立のうちにありながらも国際政治のうえではなく、国際プロレタリアートの側は圧倒的な守勢に立たされている。各国のプロレタリアート人民のさまざまな真剣で力強く戦闘的な闘争にもかかわらず、全体としては国際プロレタリアートの陣営は团结の基軸を失つて分散し、かつてない孤立と混沌を余儀なくさせられている。こうした国際的な階級間の攻防関係と国際プロレタリアートの現状を根底から変革していくたかいをぬきにしては、共産主義運動の再建という歴史的大事業は個々の国での努力のみによっては決して前進しないであろ

ターリン主義体制の崩壊は、ポーランドを除けば各国ごとの相違はある、スターリン主義体制への不満を共通項にした市民フォーラム等の主導のもとに行われたものであった。これを支えられた階層・潮流はブルジョア民主主義派、王党派社会民主主義派と雑多であり、労働者階級はこの激動の中で組織された力として自らを表現することはなく、一大衆としてフォーラム派の一部分として登場したにすぎなかった。この背景にはスターリン主義支配下で労働者階級が階級意識を解体されていたことが存在する。大衆にとって社会主義・共産主義とは、よりもなおさず現体制のことであり、体制への批判は眞の社会主义・共産主義へと向かわなかつた。資本主義の「繁栄」と「市場経済」こそ唯一の解決策であると思われた。フォーラム派なるものは当然のこととして過渡的な表現であった。一応の自由投票と議会が保証される中で、米・西欧帝國主義の強力な支援を受け、多くの国でフォーラム派、「脱社会主義」を唱える部分が勝利を収めた。しかし市場経済導入に伴うインフレと社会保障の切り捨て、失業の増加が進行し、また世界銀行、IMF、そしてその胴元である帝国主義が借款を通じて自国の経済政治を支配した。この中で労働者階級が反動的諸潮流と自らを分岐させ、独自の運動の組織化を開始していく条件が成熟しつつある。これを基盤にして東

★第四章―― ヨーロッパの住民

う。共産主義運動の再建という事業は、真に国際的な事業としておし進められなければならぬ。各国の共産主義者と革命的プロレタリアートは、それぞれの国の階級闘争の発展に責任を果たしつつ、今日、共産主義運動の再建のために国際的に緊急に必要とされている戦略的な任務を全力をあげて引き受けていかなければならぬ。

現代の共産主義者・革命的プロレタリアートが担うべき国際的任務を、われわれは次の三點で提起する。

ソ連の崩壊の目次が書かれていて、その中でソ連亡命の主張路線の敗北を根本的に批判し、マルクス・レーニン主義を現代に継承・発展させ、国際共産主義運動を再建していく一時代が始まった。われわれはソ連・東欧の社会主義の敗北の総括を、根本的なスターリン主義批判として行い、それに代わる新たな路線のもとでの国際共産主義運動の再建を全世界の革命的プロレタリアートに呼びかける。われわれはいかに力小さくとも、この時代から課せられた国際主義的任務を果たすために全力をつくすであろう。

ソ連にあっても、労働者階級は一連の政治過程においては脇役であり、せいぜい「民主改革派」の裾野に存在するのみであった。しかし共産党解散声明以降、連邦の解体、経済的政治的混乱の中にあって、労働者人民の生活を守り、新たな社会主義の旗を掲げようとする部分の登場が伝えられている。それらはいまだごく小数にすぎない。また過去の総括も新たな社会主義・共産主義の基準も不鮮明であり、思想的にも難多である。

しかし、こうしたソ連や東欧の社会主義の再建をめざす新たな動きの中から、自国の労働者階級の再組織化を担いぬき、国際共産主義運動の再建に大きく貢献する革命的勢力が登場し、成長していくのは避けられない。

運動の国際的潮流をつくりだすことをわれわれに要請している。レーニン第三インターナショナルの継承と世界党の再建を党的経路線の重要な内実の一つとして掲げ続けてきたわれわれは、こうした時代の要請に正面から応えきっていかなければならぬ。つくられるべき国際協議会は当面次の三つを最重要課題として掲げなければならない。
①第三世界革命連帶を中心とした反帝国際共同行動を国境を越えて共同で組織すること
②反帝国際共同行動のための反帝国際統一戦線の形成を共同で促進すること
③国際共産主義運動の歴史に対する共通の総括内容を獲得すること。
われわれはまずアジア地域における原則的な共産主義者たちによる国際協議会の創出を展望する。

第三の任務は、マルクス・レーニン主義で武装した前衛党の再建・建設を各国でおし進めることがある。東欧やソ連での共産党的崩壊は、各

第二の任務は、共産主義運動の再建をめざす原則的な共産主義者による新しい国際協議会を創出していくことである。それはレーニン・ボリシェビキ党が、第一インターの崩壊のなかで新しいインターを創建するために、ヨーロッパ諸国の原則的な共産主義者を「ツインメルワルド左派」（一九一五年にスイスのツインメルワルドで開かれた国際会議で形成された左派潮流）として統合していくと同じ意味をもつような歴史的事業である。スターリン主義の破産と崩壊という事態は、これに代わる新しい共産主義

共同のたたかいを媒介にしてはじめてその基礎から再建されていくのである。われわれはアジアの、そしてアジア唯一の帝国主義である日帝足下の共産主義者として、アジア規模での反帝国際共同闘争と反帝国際統一戦線の形成を重視し、その実現のために全力をあげなければなら

は、キューバ、ベトナムなど残存する社会主義諸国の解体であり、フィリピン、ニカラグアなど第三世界の階級闘争と共産主義運動の鎮圧である。これらを通して国際帝国主義は共産主義運動に対する歴史的といえる巻き返しをはかり、現代過渡期世界をロシア革命以前的世界に引きもどすことを狙っている。それは全世界の労働者・人民には搾取と抑圧の一層の強化と絶望の強制を意味する。またそれは第三世界の人民を構成的な貧困と悲惨のもとに永続的につなぎとめ続けることを意味する。こうした帝国主義の策謀に対して、反帝国主義を掲げた国際共同闘争と国際統一戦線が共産主義者の手によって再建されねばならない。この国際共同闘争と国際統一戦線の当面する中心課題はまず何よりも、帝国主義によって集中砲火をあびせられようとしている第三世界の共産主義革命運動に対する支援・防衛・連帯におかるべきである。プロレタリアーへの国際的な結びつきは、このような

国共産主義運動の内部で本物とにせ物の分解が始まり、少なくない部分が共産主義運動から脱落してしまっている。しかし一方、ソ連・東欧諸国では、新しい階級闘争の発生と結びついて共産主義を掲げる党的再建を求める動きも不可避に開始されようとしている。第三世界では共産主義運動は依然大きな権威と力を保持しており、いくつかの国の共産党は原則を堅持してたまに続いている。われわれは彼らの奮闘に大いに期待する。またこれに連帯しつつ日本における前衛党的建設に向けた決意を新たにする。わが国で建設されねばならない共産主義者の党もまた、海外からのメッセージ

海外からのメッセージ

わが同盟にあてて、ヨーロッパの一つの党から新年のメッセージが送られてきたので掲載します。

スウェーデン共産党

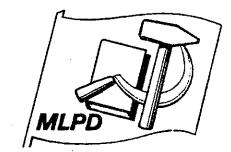
マルクス・レーニン主義・革命派
(K P M L r)



同志のみなさん。
スウェーデンの共産党 (K P M L r) を代表して革命的なあいさつを送ります。

ドイツ

マルクス・レーニン主義党
(MLPD)



今日の世界は巨大な政治的変化のただなかにあります。東欧とソ連邦の間違った、沈滞した政治システムの崩壊と分解に伴い、帝国主義は勝利を宣言し、アメリカ帝国主義を先頭とする「新世界秩序」を主張しています。軍事的・政治的支配という観点から言えばただ一つの「超大国」があるというの事実です。しかし、同時にすでに明確に三つの帝国主義ブロック (アメリカ帝国主義、ドイツを最強の勢力とするEC、日本) が存在し、その間で競争と対立があります。激化していることは明らかです。

アメリカ帝国主義が支配的なことは事実としても、他の二つのブロックで支配的な國も自らの野望を押し出し、それを追求していくまです。ヨーロッパではドイツがNATOあるいはECの枠組みのもと

親愛なる友人・同志のみなさん。日本の労働者階級、勤労住民、そして共産主義者同盟に対し心より革命的あいさつを送ります。ドイツ・マルクス・レーニン主義党は、国連に関連させて軍隊を前面におしだそうとする日本帝国主義のくわだてに對するあなたの抵抗に連帶することを表明します。

これらくわだては、平和維持軍を装いながら実際には国際労働者階級および被抑圧諸民族に向けられています。

での「歐州軍」設立を主唱し、それを歐州資本家階級自身の利害のために使おうとしています。同様のことが日本でも起こって

います。日本の野望は東南アジアの諸国への投資の増大や、その地域で支配的な役割を果たすとする積極的な軍事政策にはつきりと現れています。現在この犠牲になるのは第三世界の諸国と人民であり、また帝国主義足下の労働者階級です。

しかし帝国主義と資本主義への反撃は必ずです。搾取・不正義・抑圧が存在するかぎり階級闘争は継続し、社会主義・共産主義の理

います。ドイツ帝国主義もまったく同様の問題に積極的に取り組んでいます。人民の平和への意志は、しかしながら、こうしたいかなる試みにとっても強力な障害となっています。このようなくわだてに對する抵抗は、問題の法案がブルジョア議会によって成立した後でされています。

ドイツでは大規模な失業が現下の中心的問題ですが、政府とマスメディアはこれをおおい隠しています。

た、共産主義の再建のために総力をあげてたたかう党である。そしてこのよきな党の建設を基礎にして、①国際主義のもとに労働者人民を結集させる党②労働者人民を国際主義プロレタリアートとして形成する党③侵略反革命戦争の道に踏みだした自国帝国主義＝日帝との正面戦に労働者人民を立ち上がるさせる党の建設をめざすべきなのである。党建設の前進こそが問題の一いつの鍵を握っている。前衛としての氣風にふれる強大で革命的な党を、いまアジア人民の頭上に再び君臨しようとする策動を開始した日本帝国主義のど真ん中にうち立てよう。

(※以上で新年号論文・第一部を終わります。第一部に続き、レーニン主義プロレタリア独裁の継承をめぐる問題を論じた新年号論文・第二部を次ページ以降に掲載します。合わせてお読みください。なお、これらの九二年党建設基調を踏まえて、『烽火』一月号にわが同盟の九一年政治方針を掲載する予定です。)

想は絶えることはありません。

起こった出来事から多くの重要な教訓を引き出すことができます。

私たちの党は、マルクス・レーニン主義党は自分たち独自の分析をもたねばならない、階級闘争の中で自分達自身の決定を下さねばならない、と強調してきたのでそれほど影響をうけませんでした。とりわけ西側世界では、あまりにも多くのいわゆる共産党が他の党や政治を模倣し、今やその「主人」とともに消えていくか、マルクス主義と社会主義の理論をすっかり放棄してしまっています。

同志の皆さんに敬意を表し、あなた方と日本の労働者階級に新年のあいさつを送ります。

ドイツ帝国主義もまた同様の問題に積極的に取り組んでいます。現代反共主義が日々、科学的社会主義の「終焉」を確信する一方で、資本主義は日々、自己の現代技術を人類の最も緊急な諸問題を解決するためには用いる能力がないことを証明しています。前ドイツ民主共和国やその他の東欧諸国で失敗したのは社会主義ではなく、官僚主義的資本主義と修正主義というマルクス・レーニン主義への背信でありました。

私たちの国が再統一されたあと、今や東と西の労働者階級の統一する機が熟しています。

労働者階級の国際連帯の実現に向けた私たちの努力を強めよう！万国のプロレタリア、団結せよ！

▼ ▽ ▽
すべての先進的活動家・労働者・学生諸君！
わが共産主義者同盟（全国委員会）とともに九一年の共産主義運動の最先頭におどりいでよ！

92年党建設基調・第一部

M-L主義・プロ独の 防衛と発展がちとれ

全世界で反社会主義・反共産主義の嵐が吹き荒れている。このブルジョアジーがつくりだす嵐は、世界の人民の多くがスターリン主義による「社会主義」に絶望したことに乘じて組織されている。

ブルジョアジーの宣伝と攻撃は、崩壊し、崩壊しつつあるスターリン主義諸国家とその人民を自己の資本主義市場に組み入れることを狙い、あたかも経済的発展と民主主義に関して社会主義に有罪の判断が下されたかのように装っている。しかしわれわれプロレタリアートがたたかわねばならないブルジョアジーのもつとも中心的な攻撃は、プロレタリアートの独裁とボリシェビキ党的抹殺にある。プロレタリア独裁、このマルクス・レーニン主義の実践的適用に関していまは、経済発展をめぐる資本主義と社会主義の「競争」についていまだ判断をとまどうプロブル諸党派、プロブル知識人たちにあっても、一切の罪をスターリンに求める人々にあっても、身の安全のためにボリシェビキ党とレーニン主義から手を引かせるほどである。彼らは社会主義からプロレタリア独裁を無縁にし、いまや神となつた民主主義と自由にその位置を与えられないものかと夢想する。こうして彼らの結論は次のように得られる。マルクス主義のなかから階級闘争という機軸を捨て去り、そして結局のところプロレタリアートの暴力による権力の奪取としての資本主義打倒の革命を捨て去る。なぜならプロブル諸君にとってさえ、プロレタリアートの独裁はそれほどに恐ろしいものなのだからである。この小論をもってわれわれは、プロレタリアート独裁の旗を高く掲げようとする。資本主義から社会主義への過渡に照應する政治上の過渡としてのプロ独の第一の段階—革命戦争時のプロ独を不可避のものとしてわれわれはとらえる。

さらにわれわれはこの小論をもって、プロレタリア独裁の第一の段階—社会主義建設期のプロ独、過渡期の階級闘争の発展のためのプロ独に関する次のような探究——プロ独と複数政党制、プロ独と議会制、プロ独と民主主義、プロ独と国家——これら現実のプロレタリア大衆が現実にもつ党への問い合わせ、直接真正面からレーニン主義者としての見地を提起すること以外の何ものでもない。ロシア革命以降、七五年におよぶプロレタリアートの社会主義のための苦闘史は、これを総括するに十分な教訓を内包している。

それはまた一九世紀中期「人民の人民による人民のための政治」として簡潔に表現された民主主義の主要な一つのテーマそのものへのプロレタリアート・被抑圧人民による肉迫でなければならない。レーニンのプロ独が、労働苦と飢えと無権利のもとにあつたロシアの労働者・兵士・農民のために不可避のものであつたように、はつきりと「人民」とは誰のことが問わなければならぬ。「人民による」とはどのような方策をもつてなのが問わねばならない。この小論を通してわれわれは、プロレタリアートの独裁とは権力奪取の直後から組織されるプロレタリアートの階級闘争であること、プロレタリアートの民主主義であることを復権しようとする。プロレタリアートにとってその独裁は、彼ら自身の前衛党によって領導されるものであり、階級闘争の発展によって発展・変化し、プロレタリアートの民主主義が死滅していくと同じく、その任を果たした後には、また死滅していくものである。この時期のプロレタリアートの独裁は社会主義世界建設期の、その意味において第一の段階のプロ独である。

マルクス主義のプロ独

マルクス主義はあらゆる空想的社會主義に対する批判的実践である。その批判は、空想に対する科学の批判であるのみならず、人間の歴史を階級闘争の歴史としてとらえたプロレタリアートの独裁の理念はマルクスによってプロレタリ

アートの手に渡された。一八四八年『共産党宣言』で彼は次のように述べた。「支配を得し

た以前のすべての階級は、全社會を自分の生業の諸条件に服従させ、それによって彼らの既得の立場を確保しようとした。プロ

レタリアートもまた、自分自身のこれまでの獲得

得様式を、したがってまたこれまでの全獲得様式を廃止しなくては、社会的生産諸力を奪取することはできない。プロレタリアートは確保すべき自分のものを何も持たない。彼らが破壊しなければならないものは、これまでのすべての私的安全や私的安全保障である。…こうしてブルジョア階級を暴力的に崩壊させ、それによってプロレタリア階級がその支配をうち立てる時が来たのである」。

「自分自身のこれまでの獲得様式」とは、資本主義下における賃金奴隸としてのプロレタリ

アートの生活であり、「これまでの全獲得様式」

「労働階級はただたんにありあわせの國家機関を掌握してこれを自分自身の目的のために利用するだけというわけにはいかず」「コミュニオンは…それは本質的には労働階級政府であり、所有する階級に対する生産する階級の闘争の產物であり、そのもとにおいて労働の経済的解放が達成されるべき、ついに発見された政治形態であった」（一八七一年『フランスにおける内乱』）。こうしてプロレタリア独裁の理念は「資本主義社会と共産主義社会の間には、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に

「私が新しくやつたことは次の点を証明したことである。①階級の存在は生産の特定の発展段階だけに結びついたものであること、②階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ、③この独裁そのものは一切の階級の廢絶と無階級社会にいたる過渡をなすにすぎないということ、これである」とまとめられた。

「プロレタリアートの独裁」は一八七一年のパリ・コミューン革命の経験と総括を通して、その機軸的内実であるプロレタリアートによつて樹立される新しい国家とその権力の性格、したがつてプロレタリアートの民主主義に関する革命の見地へと発展した。

われわれはこの宣言のなかに、プロレタリア独裁の最初の理念を見つけることができる。人間の社会が剩余生産物を持つようになって以来、歴史は階級闘争の歴史であった。この歴史観のうえに、一階級による他階級の支配の道具としての国家権力の本質が基礎的に提起され、プロレタリアートも自己の解放のために、自己の国家と権力をその手に握らねばならないこと、そしてこの新しい権力の樹立は暴力をもっての革命による以外にないことが、基礎的に提起されている。



革命後発足した人民委員会議のメンバー(中央がレーニン)

照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁以外の何ものでもありえない」と総括された。

プロレタリア独裁は、その第一の理念においてブルジョアジーに対するプロレタリアートによる抑圧の政治である。同時に他方にあつてプロレタリア独裁は革命期とそれに続く社会主義建設期の過渡期の政治である。それは階級の廃絶に条件づけられるプロ独国家の死滅とともに死滅する最後の階級の政治である。のちにエンゲルスは次のように述べている。「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国有財産に転化させる。だがそうすることでプロレタリアートはプロレタリアートとしての自分自身を廃絶し、そうすることであらゆる階級差別と階級対立を廃絶し、そうすることとでまた国家としての国家をも廃絶する」（一）

八七七年『反デューリング論』)と。ボリシェビキ党とレーニンにとってプロレタリア独裁は、次のレーニンのことばが示すような重要で決定的な意義をもつていた。「マルクスの階級闘争の学説を承認するだけのものはマルクス主義者ではない。ただプロレタリア独裁の不可避性を承認するものだけがマルクス主義である。」

レーニンは首尾一貫した、そして徹底的にマルクス・エンゲルスのプロ独の理念を承認するものであった。しかしそれは理念にとどまるものではなく、迫りくるロシア革命とその前衛党建設における実践であった。われわれはまず、ロシア革命よりレーニンの死に至るまでの革命戦争時のプロ独の実践の検討を三章にゆずり、次の章をもつてボリシェビキ党建設におけるプロ独を実践問題としてとらえる。

レーリン主義のプロ独立

中央集権非合法党建設をめぐる右翼日和見主義者との対立を総括してレーニンは次のようにいった。「労働者階級の独裁は、一九〇五年以来、あるいはもっと早くから全革命的プロレタリアートと結合してきたボルシュビキ党によつて現に実行されているのだ」。プロ独を「革命時」という未来の不可避性とらえるだけでは不十分である。プロ独は先進的プロレタリアートにとって、現在の今日の階級課題である。ここに引用したレーニンの見地は、わが国にあっても圧倒的多数の日和見主義者によって無視されてきたのだが、この見地はレーニンによるメンシェビキとの党派闘争のなかで確立され、われわれにあっては、一九七〇年代の右翼日和見主義者との党内・分派闘争のなかで確立された。それはまず第一に、当面する革命の性格をめぐる、したがつて現下の党建設の性格をめぐる闘争であった。

ロシア革命におけるプロ独は、一九〇三年の第一回大会綱領で「プロレタリアートによる政治権力の獲得」と定義づけられた。この二回大會綱領を「実践的闘争に従事する党的綱領ではなく、諸原則の宣言 むしろ学生たちの綱領である」と批判しながらもプレハーノフとの一定の妥協のうえで成立させたレーニンは、一方、建設すべき党の形と質の原則をめぐっては激しい妥協なき闘争に入った。

かつてブレハーノフに代表される右翼日和見主義者も、またわが国における日共をはじめとする右翼日和見主義者にあっても、そのプロ独放棄の最初のステップはこのマルクスの「必然的に…導く」「過渡をなすにすぎない…」の経済主義的歪曲から始まっている。彼らのプロ独は革命後のいづれ直面するかも知れない予測されえない未来の問題である。しかしその場合であっても、プロ独は経済的歩を少しずつ占めていくであろうところのプロレタリア大衆の経済上の闘争が自然に直面し自然に解決していくであろう少々強力なブルジョアジーへの抑制であると彼らは考える。そこではマルクスのプロ独立理念の重要な要である「革命的転化」が完全に捨てられているだけでなく、現に存在するすべての既成国家の成立とその国家の階級的性格に関する科学的事実が、なぜかプロレタリアートの直面する革命と樹立すべき国家に関しては適用されないという大後退がなされる。

レーニンにあっては、マルクスの「革命的転化」はそれ自身として、経済的意味における資本主義から社会主義への転化が政治上の革命的

それは、一階級闘争は必然的にプロレタリア階級独裁へ導くということ。この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである」「資本主義社会と共産主義社会の間には、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時

としてのプロレタリアートの武装革命なのか、あるいは暴力革命もありうるとする、したがってそのただ一つの戦術である自然成長戦術のかをめぐる非和解の対立であった。

くるロシアの革命も、そして他のいかなる既成の国家に対する革命も暴力革命によってしかなしえないものであった。それはあらゆる国家は階級闘争の機関であり、一階級が他の階級を圧する暴力装置であり、階級の衝突を緩和させながらこの抑圧と暴力装置を法律化し強固なものにする「秩序」を創出するものだからである。そしてこの本性ゆえに国家は一階級による他階級の組織のための「監獄などを自由に使うことのできる武装した人間の特殊な部隊」によって組織されているのだからであった。「小ブルジョア政治家（したがってこの闘争の時代にあってはメンシェビキ）の意見によれば秩序とはほかならぬ階級の和解であつて、一階級が他階級を抑圧することではなく、また衝突を緩和させることは和解させることであつて、抑圧者をうつむいたおおすための一定の闘争手段と闘争方法とを被り圧階級から奪いといふことではない」というレーニンによる国家に関する見解のこの対立は、必然的に暴力革命か非暴力革命かの非和解的な対立へと発展し、次いで、したがって必然的にこの革命を指導する党的形質と今日の計画された戦術としてのプロレタリアートの実践をめぐる対立へと発展した。

党による目的意識的な階級形成、そして権力奪取のための党により計画された武装蜂起へと路線化されるのであるが、それら党により計画された革命の戦術の機軸のなかに、プロレタリア独裁の立場がつらぬかれていることをわれわれは見落とすことはできない。

こうしてマルクス主義・プロ独の理念は、ボリシェビキ党建設と革命的政治闘争のための実践として、レーニンにより未来のものではなく現在のものとなつた。「レーニンはプロ独をプロレタリアートに対する独裁と混同している」「レーニンの大衆と職業革命家についての見解はマルクスのそれではなく、バクー寧主義である」なるプレハーノフの批判に対置したレーニンのプロ独の実践は、プロレタリアートの前衛党としての中央集権非合法党、武装蜂起をめざす政治闘争の計画的な党による組織化として

レーニン主義の全否定のために声をそろえる
現代世界の小ブルジョアジーとその諸党はまた、
この革命前の実践としてのプロ独への恐怖と非
難にまずもって声を統一するであろう。しかし
彼らのあらゆる非難は、すでに革命的プロレタ
リアートにとって古い経験ずみのことであり、
この小論で詳論することは割愛しなければなら
ないが、レーニン存命中、ボリシェビキ党はこ
れらに対して十分な、今日にあっても新しい反
論をなし切っているのである。プロ独の旗を掲
げるわれわれにあっても、今日までに公表した
文書をもってそれはすでに反論したといえる。
しかし反共の嵐に屈せず革命と社会主義のた
めにプロレタリアートの前衛党を創出しようと
する革命的プロレタリアートにとって、レーニ
ン主義プロ独の復権のために、今日から反撃を
加えねばならない大きな課題がある。

それは一言でいえば、「党は党組織により、党
組織は中央委員会により、そして結局は中央委
員会は独裁者によっておきかえられる」「それ
はプロレタリアートに対する独裁制である」
（トロツキー）という批判に対する回答である。

あるいはこうともいえる。トロツキーはたしかに一〇月蜂起以来、革命戦争の現実のなかでこの批判を取り下げ、最も徹底した党のプロ独立国家権力を活用しての独裁の推進者としてレーニンと歩を一にした。しかし現代にレーニン主義プロ独立ロシア革命のプロ独立を復権し、これを発展させようとするわれわれにあっては、一九二一年、ペトログラードに発生した大規模なストライキ、続くクロンシュタット軍港での革命の英雄であった赤軍兵士たちの反乱が叫んだ政治的要求のなかの一部——ソビエトの自由選挙、投獄中のボリシェビキ党以外の社会主義者の釈放、ストライキに対するボリシェビキ政府の弾圧への抗議、労働者・農民、無政府主義者、左翼社会主義政党への言論・出版の自由の保障——への回答を避け通ることはできない。なぜならこれら本来の革命の側の人民の要求は革命戦争時のレーニン・ボリシェビキ党のプロ独立の執行のなかから出てきたのであり、レーニンはその総括をその後にあるべきであった社会主義建設期のプロ独立の実践の回答をもってなすこのないまま世を去ったからである。同時にわれわれはレーニン主義プロ独立の擁護とその現代世界への發展のために、レーニン死後に行われたスターリン主義によるマルクス・レーニン主義の破壊とロシア革命の生命の破壊を、プロ独立の側面から暴露し批判しきらねばならない。なぜならスターリン主義は、あたかも彼ら自身がレーニンの忠実な後継者であるかのように装い続けてきたからであり、今日の反共の嵐もまたスターリンの反マルクス・レーニン主義とその支配を、レーニン主義とボリシェビキ革命そのものの抹殺に利用しているからである。

革命戦争下のプロ独立

リロードによって主張された革命のための共産主義党は、党と組織を分離して考えるものであった。彼らの主張によれば、党は人民の広範な労働組合運動や、知識人の学術運動、あらゆる政府を批判する人々によって自由に構成されるものであった。彼ら党員は、綱領の思想的側面と原則の確認以外に党組織によって統制され規制されることにはならず、党組織に所属するか否かを超えるものであった。このメンシェビキの反中央集権党の思想は、また同時に現実の階級闘争と党との関わりに関して「党はプロレタリアートの前衛である」とことを厳しく拒否する見解であり、階級闘争とは現に自然発生する人民の各種の闘争、その中心は自然成長的な労働組合の闘争であった。こうして既成国家の本性の把握から始まるプロレタリアートの独裁の理意は、人民の自然発生的闘争の外部から前衛党によって階級本隊に注入される革命のための、権力奪取のための政治闘争組織化の任を党が担うか、あるいは放棄するかの闘争として現在の課題であった。これはレーニン主義として、

一九一七年一〇月一四日、ペトログラード・ソビエトは事実上ボリシェビキ党の計画と指令にもとづき武装蜂起を行つた。同時に翌一五日に開かれた第一回全ロシア・ソビエト大会はボリシェビキ党単独の人民委員会議を組織し、臨時労農政府樹立の宣言を単独で行つた。首都の政治権力は実際上、ペトログラード・ソビエトに握られ、ボリシェビキ党はその単一の指導部としてペトログラード・ソビエトの多数派であつた。第一回全ロシア・ソビエト大会の有力なボ

全ロシア農民ソビエト臨時大会代議員二三〇人中、左派エスエルは約六割を占めていたのであるが、彼らの主導により大会は労働者・兵士ソビエトとの合同を決議し、左派エスエルは入閣に同意した。

こうして一ヶ月後には、ボリシェビキ一人、左派エスエル七人の複数政党による人民委員会議（内閣）が成立した。

10月蜂起時のプロ独

革命の臨時政府として発足した人民委員会議は、それ以前からボリシェビキ党みずからが旧国家の政府に対して要求し続け、実際に、当時の全人民政治要求の一つでもあった憲法制定会議を招集し、この代議員を選出する全国的な選挙の実施に同意せざるをえなかつた。これは今日のブルジョア共和制下の普通選挙にきわめてよく似たものであつた。ここでは二〇才以上の国民男女が有権者であり全国を約八〇の選挙区に区分し、投票率は約五〇%であったといわれている。投票結果については、今日判明している六五選挙区についてエスエル右派三九・六%、ボリシェビキ一四・〇%、カデット四・七%、メンシェビキ一・六%、左派エスエル〇・八%、少数民族の政党その他一八・三%であったといわれている。左派エスエルについては、この得票結果は実際勢力を表現してはいない。彼らはエスエル右派との分裂後、各区で独自の候補者を立てる時間的余裕をもつていなかつたからである。憲法制定会議の構成上は、それまで政府与党であったカデット、メンシェビキが半數にも満たなかつたことと同時に、一〇月蜂起により権力を握ったボリシェビキ党が四分の一の支持しか得てないことが見てとられる。発足したソビエト政権の与党であるボリシェビキと左派エスエルは、約七〇〇人の代議員中、それぞれ約一七〇人約四〇人、合計しても全体の約三〇%を占める少数派にすぎなかつた。

干涉戦当時のロシヤ
（1918年8月～1919年9月）
マイル
100 0 100 200 300

その結果、当然にしてボリシェビキ内で、多数派と妥協するかしないかをめぐる論争が発生した。レーニンはこの論争のなかで断固として多数派との妥協を拒否し、一九一八年一月五日に開かれた第一回憲法制定会議を開会後一〇時間にして武力をもつて強制解散させた。強制解散の直接の理由は、憲法制定会議が一月三日にソビエト中央執行委員会で決議された「勤労被擁取人民の権利の宣言案」の審議を多数決で拒否したことによるが、それ以上にレーニンによれば暴力的解散の真の理由は、彼の四月テーマ以来の革命権力に関する主張である。「ソビエトはブルジョア民主主義的な代議制に比べ民主主義のより高度な形態」であり、「選挙が行われた時は人民の圧倒的多数が、一〇月革命の意義をいま十分に知ることができなかつた」からであり、「形式的、法律的でなく、社会経済的、階級的」な理由での、「国民一般でなく労働階級の意思」の執行であった。

ボリシェビキ党と左派エスエルは憲法制定会議解散の直後、一九一八年一月一三日に、全ロシア労働者・兵士ソビエトと全ロシア農民ソビエトを合同し、第三回全ロシア労働者・兵士・農民ソビエト大会を組織した。この大会は「勤労被擁取人民の権利の宣言」を採択し、ロシアを「労働者・兵士・農民ソビエト共和国」と宣言し、「中央および地方におけるすべての権力はこれらのソビエトに属する」ことを明らかにした。大会はさらに土地の「全勤労人民」所有化、労働者統制、銀行の国有化、赤軍の創設を決議し、一〇月革命が社会主義の理念を体現していくものであることを確認した。こうしてその革命権力の名称から臨時ということがついに取り払われた。

この第三回全ロシア・ソビエト大会の代議員中、所属党派が明らかになつているものはボリシェビキ党が約五五%、左派エスエルが約一八%と伝えられ、この大会が選出した中央執行委員会のなかには、注目すべきことにエスエル右派やメンシェビキの代表さえ含まれていた。われわれは便宜上、以上をプロ独の第一の段階——「革命戦争時のプロ独」のなかの「一〇月蜂起時のプロ独」としてそれ以降と区別をしよう。ここに認められることは、ロシア革命の一〇月蜂起はロシアの旧国家の支配階級はもろん、動搖する小ブルジョアジー・地主・知識人層のための彼らによる革命ではなく、労働苦と貧困にあえぐ被支配階級層のための、彼らによる革命であり、この革命のためのプロレタリア独裁の新しい国家権力創出の階級闘争であつたということである。そこでは複数政党による権力か、あるいは単一の党による権力かは何ら問題にならず、ただこの革命、いま始まつたばかりの革命の目標が社会主義世界の実現にあることを承認するかどうか、いま始まつたばかりの資本主義から社会主義世界建設への過渡期——その道がいかに困難であるかを知つてゐるものによる権力であった。

こうして一〇月蜂起時のプロ独は、党による武装蜂起として具体化し、ソビエト権力として具體化し、憲法制定会議の強制解散として具體化したのである。

しかしレーニン・ボリシェビキ党によるプロ独の実践は、ここにとどまりその任務を死滅させていくことはできなかつた。次に描くようにそれはただちに引き続き「革命戦争時のプロ独」へとますます強化されなければならなかつた。それは主要に、世界革命のいっただんの挫折と襲いかかるロシア旧支配階級と帝国主義諸国の反革命戦争にかちぬくための、革命ロシアの未曾有の階級闘争の組織化の不可避性に根拠をもつものであった。

一九一二年三月、クロンシュタットの反乱のさいちゅう、ロシア共産党第一〇回大会が開かれ、ネップ（新経済政策）の採択とともに「党の統一」についての決議案を多数決で採択した。「大会はすべての分派グループにただちに解散することを命じ、いなる分派活動も許さないよう厳重に注意することをすべての党組織に委任するとともに、大会の決定を履行しないものはただちに無条件に党から除名されることとした。大会は中央委員会に全権を与え、中央委員が規律に違反した場合、また分派活動を復活し、または容認した場合には中央委員会および党からの除名にいたる一切の党としての処罰の手段をとることにした」（『ソ連共産党歴史小教程』）。これによつて党内の分派活動は公的に禁止されることはなつた。党员は個人として党的政策を批判する自由はもつが、独自の綱領をもつ分派を作り、その分派のなかで党的批判を行ふことは禁止された。また党的決定がなされたあとは絶対的服従が義務とされ、違反した場合には除名されることとなつた。

党における統制の強化と権限の集中に先行して、他党派に対する弾圧とボリシェビキ党によ

る一党独裁も進行した。チェカ（全ロシア非常委員会）を通じての一九一八年四月の無政府主義者の大量逮捕、六月一四日、全ロシア中央執行委員会布告にもとづく右派エスエル、およびメンシェビキ（彼らは一八年六月にいたんソビエトから追放されたが、その後の国内戦過程で政治活動の自由を回復していた）の政府機構表して反乱を起こした左派エスエルの非合法化などがそれである。

こうしてレーニン主義におけるプロレタリア独裁は、その第一の段階であった「革命戦争時のプロ独」の最も烈な形態をもつて至った。それはくり返すが、党内における統制の強化と権限の集中、革命国家指導におけるボリシェビキ一党制であった。

革命戦争時のプロ独に関し、世の多くの評論家がレーニン死後のスターリン独裁の前身をこのレーニンのプロ独実践に見出し、レーニン主義を革命の現実から切離して葬り去ろうと試みる。また他のものは、レーニン自身がその国家論で開花させた革命の理想を否定し、ますますもつて「死滅させるべき」国家権力を恐竜のように強大化させたと非難する。彼らすべては、世界で最初のプロレタリアートの革命が直面した、そして恐らくどのような革命もそうであろうところの武装した敵との血みどろの階級闘争という革命の現実を拒否している。われわれはしたがって次に階級闘争がそれを要求した当時の情勢をとらえておかねばならない。

強制された非常措置

レーニンとボリシェビキ党にあって、ロシア革命がその眞の勝利を得るために全世界（二〇世紀はじめにあって世界の実質的意味はヨーロッパであったといえるが）の革命、とりわけ高度に発達した資本主義国（革命なくしてありえないもの）であった。彼らにあって、社会主義社会の建設は当然のこととして世界的規模をもつてしか勝利することのない社会主義世界の戦取のことであつた。これはレーニン主義にあって、いささかも疑いを入れない科学的確信であった。一九一八年一月の第三回全ロシア・ソビエト大会でレーニンはこの点を次のように述べている。「われわれが社会主義への過渡期を始めたにすぎず、まだ社会主義に到達していない」ということについてわれわれは幻想をもつていてない。われわれは國際プロレタリアートの援助なしに、この過渡期を終わることができるなどといふ希望に惑わされたことなど決してなかった。われわれはこの点についてかつて誤解したことはないし、資本主義から社会主義への道がいか

に困難であるかを知っている」（『人民委員会議の活動報告』）。

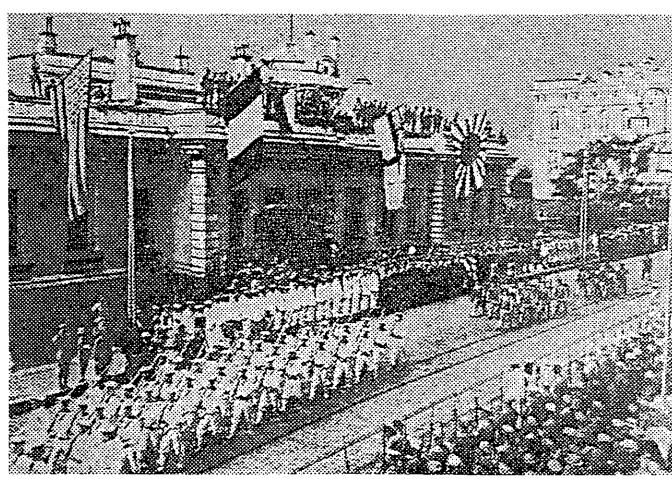
さらに當時レーニンは、ロシア革命の孤立がそれほど長い期間にわたるとは考えていないかった。むしろただちにロシア革命の烽火は資本主義大国の革命へと引きつがれると考えていた。レーニンは統いて次のように述べている。「いまわれわれは世界のすべての国で、社会主義革命が日々にというより、時々刻々に成熟しつつあるのを見ている」。そして「（かつてマルクスとエンゲルスは）次のようにいった。フランス人が火ぶたを切り、ドイツ人が完成させる（であろうと）。：（いまやこういわねばならない。）マルクスとエンゲルスはわれわれロシアの勤労被搾取階級に、國際社会主義革命の前衛という名譽ある役割を与えた。：ロシア人が火ぶたを切った。ドイツ人、フランス人、イギリス人は完成させるだろう。そして社会主義は勝利するだろう」（同前）。

しかし世界革命のただちの可能性は遠のき、むしろ長い時代にわたるロシア革命の孤立が予測された。むしろ同じ大会でレーニンがマルクス・エンゲルスのことばを借りてのべたように「資本主義から社会主義へ移っていくには長い生きの苦しみを必要とするであろう。プロレタリアートの独裁、いっさいの古いものの破壊、資本主義のあらゆる形態の仮借ない絶滅の長い時期を必要とするであろう」という予測が革命の司令部にかつて満ち満ちていた楽觀に代わって現実のものとなつた。

その苦闘は、三年におよぶ反革命軍によるソビエト政権への武力攻撃は始まつた。ソビエト政権の普遍的課題下の苦闘であった。

一八九年中頃には旧ロシア帝国領内には反革命軍事力をもつて反ソビエト政府が三〇以上存在しており、一八九年にはソビエト政権はモスクワを中心とするヨーロッパ・ロシアの中央部だけをかろうじて維持する実際上は一地方政権であったといわれる。

一八九年にはいくつかの反ソビエト政権が「全ロシア臨時政府」を結成し、イギリス軍の支援を受けた「全ロシア最高統治者」コルチャックの軍隊が北方と東方から、デニキン軍が南方から、エストニアからはユデニッチ軍が、クリミヤからはウランゲリ軍がモスクワをめざし進撃していた。三年以上にわたる国内反革命軍とソビエト革命政権の内戦は同時に、帝国主義諸国の侵略反革命に対する革命戦争でもあった。一七年一二月には、フランスがウクライナに、イギリスがシベリアとザ・カフカースに侵攻するという勢力圏分割協定と作戦領域が両国間に



ロシア革命鎮壓のため出兵した日本軍（ウラジオストック）

結ばれていた。日本は中国東北地方の権益をシベリア地方にまで拡大する意図のもと、七万以上の軍隊を一八年から二五年までのあいだシベリアに派兵した。ドイツ軍は一八年ウクライナを占領し、ドネツ炭田の石炭とカフカースの石油から革命ソビエトを切り離し、ソビエト工業の大半を瀕死の状態に、ほとんどの工場を休止に追い込んだ。これらフランス、イギリス、ドイツ、日本、アメリカはそれぞれ反ソビエトの援助と引きかえにソビエト政権破壊後の利権について約束をとりつけたといわれる。

革命戦時のプロ独をとらえるために最後に見ておかねばならないことは、このような内戦と侵略軍との戦争下でのソビエト・ロシアの経済上の困苦である。とりわけ食料の欠乏は過酷なものであった。都市にはほとんど食料はない、しただ。価値の下落したループルは農民から食料を購入する代價たりえなかつた。ソビエト政権は壊滅状態の工業が供給できるかぎりの工業製品を、食料提供の見返りとして農村へ送つた。しかし、にもかかわらず都市への食料の供給は不十分であり、激化する革命戦争を担う赤軍にも、工場の労働者にもわずかのパンを支給することすら不可能であった。

一九一八年三月三日、ブレスト・リトフスク講和。同じころに開始される労働強化、テーラーシステムの導入、一九一年正規軍の編成、農民からの食料の暴力的徴収もまた、先に述べてきた一党による独裁と同じ別の側面における革命戦争時のプロ独としてとらえられねばならない。

ブレスト・リトフスク講和は党内の深刻な対立をしりぞけ、レーニンによって「ロシアで社会主義が成功するためには、すくなくとも数ヶ月の中間期が、つまりそのあいだに社会主義政権がまず国内でブルジョアジーに勝ち、広く深い大衆的な組織活動にとりかかるために、まったく

たく自由に行動すべき期間が必要である」との判断をもつて締結された。この講和条約によってソビエト・ロシアは大きな犠牲を払った。ソビエト・ロシアはラトビア、エストニア、ポーランドをドイツに割譲し、フィンランド、ウクライナのドイツ勢力下での独立を認め、ザ・カフカースの一部をトルコに与えねばならなかつた。こうしてソビエト・ロシアは人口の約三分の一、最大の穀倉地帯、石炭、鉄、石油を含む工業中心地を失うことになった。労働強化、テレーシステムの導入の決断はおよそ次のようなものであった。一八八三年三月六日、ロシア共産党第七回大会は次のように決議している。「ロシアの労働者・農民の自己規律を高めるために：单一の鉄の意思で固められた大衆組織を・団結した献身的行動をとりうる組織をつくり出すために：もつとも精力的な容赦のない断固とした厳格な措置を講ずることを、わが党にとってもソビエト権力にとっても第一の基本的任務とみなす」。この決議はもちろん「社会主義の物質的・生産的源泉であり基礎である機械制大工業」について「ロシアの労働者は先進諸国の労働者と比較すると質の劣った労働者である」「今日、革命が社会主義のために労働過程の指導者のただ一つの意思に大衆が異議なく服従することを要求している」からであった。革命戦争遂行のギリギリの工業製品を引き出さためのこの労働強化は、レーニン自身かつて現代の苦役の制度、同一の労働時間に労働者から三倍以上の労働を

10回大会による転換

われわれはこの章の多くを一九一七年から始まるレーニンとボリシェビキ党のいくつかの政策の素描に費やしてきた。しかしその政策はアントラマンに引き出したものではなく、革命戦争時の党によるプロ独のできるかぎりの全体像を描くために引き出されたものである。レーニン主義による革命戦争下でのプロ独は決して大衆にその責を負わせることをしない党によって決断され、党によって大衆に説明され、党によって執行される党のプロ独であった。それはマルクスによって、そしてレーニン自身によって掲げられた国家の死滅、したがってその前提となる階級と階級対立の廃絶、その前駆としてプロレタリアートの権力によってなされる命令するものとされるものの区別の存在の着実な解消、組織による統制と強制の着実な解消を否定する見地とは無縁な革命の緊急の必要から生まれたいたんの非常措置、いったんの後退であった。これを支え、これらの革命戦争時のプロ独をならぬくレーニン主義は、マルクスが『フランスの内乱』で原初的にのべたように「国家はある

一步後退であることを鮮明にしたうえでネットでソビエト政権が採用するにまで至った。またいたんは放逐した工場におけるブルジョア専門家を再び生産の指導のために工場に導入した。これは当時メンシェビキが批判したと伝えられる「経済の分野におけるプロレタリアートの獲得物を奪う政策」という批判をまつまでもなく、レーニン自身によって「プロレタリア権力の原則からの後退であることは明白である。…社会主義的ソビエト国家権力の一歩後退であることは明白である」ことが自覺された非常時の強制であった。

この非常時の政策は、赤軍建設の責任者となつた人トロツキーが一九一八年四月に提起した旧帝軍将校の軍事専門家としての導入、一九年ロシア共産党第八回大会で決定された全人民の武装に代わる正規軍の編成と将校選挙制に代わる任命制をまた必要とするものでもあった。トロツキーの手になる大会テーマは次のように述べている。「労働者と農民の：義務的な軍事訓練をもとにして軍隊を形成すればそれが最良のものであることは理論的に否定できないであろう。…やがてわれわれはそのような軍隊を実現するであろう。…しかしながら国内外の敵対する階級に対する緊急な反撃の必要性は、数年を要するであろう労働者と農民の民兵の組織化に着手することをわれわれに許さなかつた」と。

階級による他の階級の圧迫の機関以外の何ものでもなく、しかもこれは…民主的共和政治にあっても、君主制においても少しも異なる。それはせいぜい一つの弊害であって、この弊害は階級支配を争う闘争に勝利を得たプロレタリアートにも残される。そしてプロレタリアートはその最悪の方面をコミューンと同じようできらるかぎり速やかにたち切ることを余儀なくされるであろう。そしてついには、新しい自由な社会状態のもとに成長した世代は、すべての国家の遺物を放棄することができるであろう」につた。

この点からしてレーニンが病のため実際にその活動を終える二年前の第一〇回党大会は注目されねばならない。世界革命のすぐさまの可能性は遠のき、反革命軍と外國侵略軍が赤軍によって壊滅・駆逐された一方、クロンシュタットの反乱に見られるようにソビエト陣内よりの不満は増大し、党内にあっても二つの大きな分派が発生していた。ソビエト陣内の不満は革命戦争と戦時共産主義に疲弊しきった人民のとりわけ農民の経済的要求と政治的自由の要求であり、党内外派は生産の組織化と統制を労働組合にまかせサンジカリズム的国家組織の実現を要求する分派と、党内、ソビエト内での政治的自由を要求する分派であった。レーニンはこれらに対

し、まず経済的要求に対し、資本主義経済への一步後退であることを鮮明にしたうえでネットで激しく批判したテーラーシステムを、ブルジョアジーに代わってソビエト政権が採用するにまで至った。またいたんは放逐した工場におけるブルジョア専門家を再び生産の指導のために工場に導入した。これは当時メンシェビキが批判したと伝えられる「経済の分野におけるプロレタリアートの獲得物を奪う政策」という批判をまつまでもなく、レーニン自身によって「プロレタリア権力の原則からの後退であることは明白である。…社会主義的ソビエト国家権力の一歩後退であることは明白である」ことが自覺された非常時の強制であった。

この非常時の政策は、赤軍建設の責任者となつた人トロツキーが一九一八年四月に提起した旧帝軍将校の軍事専門家としての導入、一九年ロシア共産党第八回大会で決定された全人民の武装に代わる正規軍の編成と将校選挙制に代わる任命制をまた必要とするものでもあった。トロツキーの手になる大会テーマは次のように述べている。「労働者と農民の：義務的な軍事訓練をもとにして軍隊を形成すればそれが最良のものであることは理論的に否定できないであろう。…やがてわれわれはそのような軍隊を実現するであろう。…しかしながら国内外の敵対する階級に対する緊急な反撃の必要性は、数年を要するであろう労働者と農民の民兵の組織化に着手することをわれわれに許さなかつた」と。

第二に、不可避と予測される革命ロシアの持久戦のなかで、反乱とブルジョア民主議会制の要求に明白な峻別をなし、反乱への暴力的弾圧と区別し、一定のブルジョア民主議会制との妥協を不可避とする見地であつたといえる。しかしその場合にも、第一の場合にも決定的な前提条件が必要であった。それは政治・経済における資本主義への一步後退を革命への持久対峙戦略に組み込むためには、まず何よりもプロレタリアートの階級闘争を、権力を奪取したところに組織しておこなうことが必要であった。それはおそらく国家統治と経済の運営に関して、ブルジョアジーによってではなくプロレタリアート自身によってより高度に運営しきるために階級闘争であり、同時に世界革命へ直接に参加しそれを支持しきる国際主義階級闘争であつたと考える。

したがつて第三に問われるべきは、この新しい階級闘争を指導し、前衛となるべくボリシェビキ党の再度の党的革命の不可欠性であった。それは三年にわたる国内戦とその勝利による圧倒的なボリシェビキ党の権威の高揚のなかで陥っていた党的の負の側面である「連合党」の実態を清算し、单一の意思一致のもとでより激しく複雑になるであろう今後の階級闘争を指導しきる中央集権党を再建することであつたとどうぞらえる。そうすることによってロシアの党はその国家指導の任から着実に世界革命の任へ發展することができ、ソビエトと赤軍を国際主義階級闘争の主なる団結体へと発展させる指導任務につくことができるであろう。

われわれは一九一二年のロシア共産党第一〇回大会を以上のようなプロ独の側面でみると、その第一の段階である革命戦争時のプロ独闘争の主なる団結体へと発展させる指導任務につくことができるであろう。

ここには眞の意味での、そして現代世界共産主義運動にとってまさしく課題となる教訓が存している。これをより鮮明にするために一〇回大会の課題とそれが着手した地平を換骨奪胎

し、ロシア革命とその社会主義をまったく別のものにしたスターリンの独裁について、ごく簡単にとらえてみる。それは同時に、そうすることによってスターリン一国社会主義の瓦礫とスターリンの独裁国家の瓦礫のうえに吹きすさぶ

スターリン独裁の批判

共産主義世界、それは人間が支配されるものと支配するものに分裂して以来、労働苦と貧困と無権利にあらざる被支配労働階級の理想であった。人間の歴史はこれを証明する無数の事実に満ちているが、ここに一つの「宣言」をとりあげてみよう。「いく千というものが牢で死んでいくのを見るがいい。しかも債権者らはこれらの人々が支払えないのを知っていることである。また墓場のような生活の悲惨を見るがよい。無慈悲な連中の心を満足させるために毎年、何人の人々が飢えて死んでいくのか知るがよい。そしてできるものなら債権者が気の毒な債務者を人為的な死のうちで最も残酷なもの、すなわち餓死をもって罰することを許しているイギリスの法を廃するがよい」「政府がその役割を知り、人民の権利と自由を守る夜警として機能し正義が平等に行われているかどうか注意し、富人は彼らに対する障壁となり、不当に富める人と貧乏にあつた人が作られないようにするのであれば、そのような政府に服従もしよう。しかし為政者がその地位を立身と考え、日々虚飾とおごりの生活にふけり、人民を自分の使役と楽しむための奴隸とみなして專制するなら、そのような政治は暴虐、貧困、その他人生のあらゆる難儀以外の何ものでもない」「不当な権利侵害を許すことがきず、弱いものが甘受していられる惨めな境遇を拒否し、暴政に屈伏することをいさぎよしとしないなら、それはくびきをふり払おうとする高潔で偉大な精神の現れなのだ。そしてわれわれこそそのような人間である。いずれそうなるに違いないが、世界がわれわれに戦いを挑んでくるなら、守るにも攻めるにも自然法がわれわれの根拠になる」「あらゆるもののが共有となつてゐるわれわれの根拠地リバタリアでは金は何の役にも立たなかつた。そして個人が私物を確保しておくこともなかつた。この人が私物を確保しておくこともなかつた。これが彼らは環境の変化に気づかぬわけもなく、したがつて非常に勤勉にまた忠実に働いた」。

これは一八世紀初頭、あるイギリス海賊船乗組員の手記である。リバタリアとは彼らがマダガスカルに築いた根拠地共和国の名である。

反共・反プロ独の嵐に抗して、世界の各地でマルクス・レーニン主義の復権と現代革命への発展をかけて決起する新しい共産主義へのわれわれからの連帯のメッセージを掲げることになるであろう。

マルクス主義はただこれらの、おさえようもなくわき上がる共産主義の希求に科学的な根拠を与える、その理想社会を「労働が生活の第一の喜びとなり、能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」ことのできる共産主義世界として目標づけ、そして何よりもこれを実現する力はただ一つプロレタリアートの階級闘争であることを見明らかにしたのである。

ロシア革命はひとりロシア人民のみならず、全世界のプロレタリアート、被抑圧人民の希望であった。それは理想の実現に向かって未知の荒海に乗り出すプロレタリアートの船であつた。そこには過去の経験にもとづく航路図はなかつた。ただその船の進む力はただ階級闘争の力のみであり、その力はプロレタリアートの独裁といふ新しい力であることが確信され、国際プロレタリアートの世界革命という方向が確信されたにすぎなかつた。ロシア革命はこうしてその最初の荒波を乗り切つた。それは革命戦争時而非常時の共産主義であり、プロレタリアートの独裁であつた。

レーニンの後をついだスターリンに課せられた任務は、ロシア革命の烽火を世界革命の炎へと燃えたたせることにあつた。ロシア人民の階級闘争を國際主義で武装させ、世界人民の階級闘争と革命への連帯にロシア人民を決起させ続けることについた。その階級闘争の物質的条件としての生産力の発展もまた、決起する階級闘争のエネルギーによつてのみ可能であつた。党はまたロシア人民の階級闘争を、長期にわたる過渡期世界の世界階級闘争の根拠地国家の形成と、その国家の直接の運営者へと形成する任務につかねばならなかつた。それはしたがつて、戦時プロ独下で不可避であつた党による国家の直接運営の任から着実にソビエトと赤軍の階級闘争指導の任に転化するための党の革命を完遂することにあつた。

しかし実際に進行したスターリン独裁はこの任務とは別の道をつき進んだ。以下にいくつかのスターリンによる国家指導・党指導を簡単に見てみよう。

まず重視しておかなければならないことは、一九一五年四月に共産党の正式決議としてスターリン主義のしたがつてスターリン独裁の総路線となつた一国社会主義路線である。これに関する

批判はすでに第一部で行われてゐるのでここではふれることをしないが、ただく返しておくなれば、一国社会主義路線こそ決定的な反マルクス主義・レーニン主義であり、世界の被抑圧人民の希望である共産主義、彼らの指針である共産主義を理論的にも実際的にも唾棄（だき）するものであった。そして本小論でのべてきたレーニンとボリシェビキのプロ独の苦闘を完全な意味において無意味な苦闘にしてしまつものであった。

スターリン一国社会主義路線は、三六年一月の第八回ソビエト臨時大会で採択されたスターリンによる憲法によれば、ソ連にはすでに工業化と農業集団化、そして大肅清によって社会主義が実現したとされ、後にフルシチヨフによりソ連では社会主義が完成し、より高い段階、共産主義の段階に入りつつあると強弁されるにまで至るものであった。

スターリンによればソ連一国のみを社会主義化させるためには工業の発展が不可欠であった。このためにスターリンはまずレーニンのネットワーク線を大転換し、一九二八年第一次五年計画に人民を大動員し、全世界が目をみはるような工業生産を達成した。同時に一九二九年一〇月、農業と農民からロシア工業化に要する膨大な資金を捻出するために、農業集団化が命令され、二年間、地方によつては三年間のあいだにこれを完遂するよう命令が下された。この全面集団化政策は工業五年計画の巨大な資金を農民から得るためのもの、スターリンによるプロ独の執行といえるが、これはロシアの農民にとって農奴制導入以来の悲惨事であったといわれている。集団化は本来階級闘争として指導され、農民のプロレタリア化として長期にわたる党の大指導課題であったが、スターリンは次は、敵とされる中農は客観的・経済的な根拠をもつて指定されることなく集団化に対する農民個々の態度によつて恣意的に選び出され、追放された農民数は一千万人に達したといわれている。

ソ連一国を社会主義化するという空想のための工業化はスターリンによればどのように位置づけられていたのであろうか。スターリンは次のように述べている。「われわれは工業化によって社会主義の方向へ全速力で進んでいる。われわれは金属の国、自動車の国、トラクターの国になりつつある。われわれが長年の後進国ロシアに別れをつげ、ソ連という国を自動車に乗せ、農民をトラクターに乗せるとき、自分たちの文明をたいそう自慢しているブルジョアたちはわれわれに追いついてみるがよい。その時、われわれはどの国が後進国で、どの国が先進国なのかを知ることができるであろう」と。またスターリンはソ連の工業化について「資本主義国に包围されているという情勢のなかで、われわれの独立を守りぬかねばならないという点から見て

も工業化は正しいのである。国防のための十分な工業力をもたねば独立を守りぬくということは不可能なのである」とのべている。この時われわれは、あと一つの彼のテーマ「ソ連を機械や設備を輸入する国から輸出する国に変え、それによって世界の労働者、被抑圧民族を革命化させるための強力な手段として役立つ」とのできる独立の経済単位の手本となりうるようになる」を知ることによって、次のようにスターリン工業化路線——そしてこの必要性から農民に対する彼の「プロ独」の執行は正当化された目的を知ることができるだろう。

スターリンの工業化路線は急速に社会主義化という一国社会主義路線の名目から離れ、ロシア民族主義、愛国主義が社会主義にとって代わり、無目的な富国強兵国家主義がソビエト国家にとって代わり、そして世界革命をロシア一国の生産力と軍事力の波及効果に期待する反国际主義が、レーニン主義國際主義にとって代わったのである。

スターリンによる独裁の最悪の例示として常に指摘される、われわれには決して許すことのできない犯罪は、一九三五年から始まる「大肃清」である。この問題についても第一部での述べているのでここでは詳しくふれないが、これは外国のスペイン、帝国主義のスペインの肃清ではなく、ましてやスターリンに課せられた長期にわたる革命ソ連の持久対峙戦にそなえてのボリシェビキ党強化のための「党的革命」などでは断じてなかつた。それは社会主義とは無縁のスターリンの個人権力を確立するための同志殺し以外の何ものでもなかつた。この同志殺しをたとえその一部でも容認するくらいなら、むしろ外国人記者に公開された肃清裁判で、ボリシェビキ党の内紛と分裂を露出することを恐れ一言の弁解を拒否しておかねばならない。

レーニンのプロ独の理論的骨格は彼の国家論のなかに集中的に表現されている。それはまず、あらゆる国家は支配階級の他の階級に対する独裁の道具であるとの国家の本質規定から出発する。あらゆる革命がそうであったようにプロレタリアートのブルジョアジーに対する革命もまた、組織されたプロレタリアートと、これと結合した前衛としての党によってしかなしえない。したがって資本主義から社会主義に至る政治上の過渡であるプロレタリア独裁は、革命に至る前段からプロレタリアートの革命への組織化、その前衛の建設の形質として実践化する

ものであり、レーニンにあっては中央集権非合法党と赤軍・ソビエトへの大衆の組織化に到達する革命的政治闘争の建設戦として実際問題であった。

弱化されることがなかつたことで十分証明される。レーニンのプロ独はその国家論によって基準づけられていた。プロレタリアートの国家は國家としての国家の最後のものである。プロレタリアートの国家は、それが奉仕する社会主義世界のなかで眠り込み、死滅していく最後の国家である。それは全世界に階級の死滅がおし広がり、階級対立がなくなり、個としての人間の可

能性が最大限に解放され、個と社会との対立のあらゆる根拠がなくなるにつれ国家はその存在の必要性をなくしていくからである。

スターリンにあっては彼の国家はこの基準をなくしていた。なぜなら彼にあってはプロレタリアートの国家はその本性において古い国家と変わることではなく、ただブルジョアジーに奉仕する国家ではなく、プロレタリアートの道具としての国家であり、この道具としての有用性から、その国家の仕組みがまったく新しく創出されるだけである。マルクスにあってはこの仕組みをパリ・コミューンに見出し、レーニンにあってはソビエトに見出した。そして両者は共通してこの新しい仕組みを建設し、この仕組みをもって新しい階級闘争に立ち向かわせるためには、革命時の党以上に強力なプロレタリアートの前衛党が不可欠であることを鮮明にしていられる。なぜならこの新しい国家の建設は、敵階級と資本主義の激しい攻撃のさなかに行われねばならず、その建設の全過程は、まだ生まれて間もない国家を道具として用いつつの建設であるからである。

われわれはこの段階を革命戦争時のプロ独と呼ぶが、それは非常時のプロ独を不可避とするもので、野戦軍の規律と統一と集中を不可欠とするものである。ブルジョアジーが激しく恐れ非難するレーニンの一党独裁は、ボリシェビキによるソビエトとその国家に対する独裁は、それが原則ではなく、革命戦争指導上の不可避の結果である。確実にいえることは、これを恐れ、ちゅうちょするものは決して革命を勝利させることはできないということである。

しかし一九二四年後のスターリンの独裁は、レーニンの革命戦争時の非常時のプロ独ではなかった。それはスターリン自身がその憲法の前提としている「ソビエトでは社会主義が実現した」時以降、不必要である独裁が強化こそされた。

それはすぐれて実践上の問題として、プロレタリアートの階級闘争の道具としての国家である。すなわちこの時代（社会主義建設期）のプロレタリアートの独裁は、この任務の発展のためのプロレタリアートの特殊な政治でなければならなかつた。

それはすぐれて実践上の問題として、プロレタリア民主主義の全面的な発展に具体化するプロレタリアートを真の社会の統治者へと武装するための特別の開かれた統治機構の創出であった。そして党を世界革命の党へと革命し、赤軍・ソビエトの新しい階級闘争の前衛へと改組する実践であった。

社会主義建設のプロ独

一九二一年のロシア共産党第一〇回大会は、地上最初の社会主義革命が、その革命戦争の非常時を終わり、社会主義建設 長大な世界革命

の時代へと隊列をととのえる最初のものであつた。それはまず何よりもロシア共産党の世界党への改組、ロシア共産党を社会主義世界への持

久対峙戦への前衛たるべく革命することから始められた。そうすることによって資本主義への妥協たるネップはまた、世界革命のための持久対峙戦略の重要な一側面戦術たりえた。しかしながら同時に非常時を乗り越えた共産党の任務、レーニンが理論的には設定しつつも未着手のままに世を去り、後の共産主義者に残した課題は、この段階における階級形成、この時代における新しい階級闘争を実践化せしめることであった。

一〇回大会が歴史的な転換点として着手したこれら総体は、戦時プロ独のうえに成立する社会主義建設のプロ独の課題であった。このプロ独の主なる方向は、一方においてプロレタリア民主主義の発展をかちとるための階級闘争であり、他方において、他民族、他国の革命への全面的な連帯のための階級闘争である。この小論についてはわれわれは後者を割愛し、前者についてマルクス・レーニン主義の原則とわれわれの見地を明らかにする。

民主主義が人民 (*demos*) と権力 (*kratos*) の結合として出発した理念であるならば、この民主主義もまた支配階級として位置

争の理念であった。今日、普遍的真理として存在するかに見える民主主義もまた階級闘争のかでとらえられねばならない。人民とは誰か。人民によるとはいかななる手段をもってなのかな。そして人民のためとはいかななる社会目標をもつものなのが、過去にあっても、現在にあっても階級間で争われる。民主主義は、ひいては自由と平等と人権を包含し、現代世界の国家との政治の基準であるかのように仮装し、人間界の唯一の主人となつたかのようにふるまうブルジョアジーの国家を安定させる任務につく。ブルジョアジーの力がまだ十分に強力でなく、その国家もまた十分に強力でなかつた近代においては、民主主義は過激・暴民の政治として當時の富裕な市民層から忌避された。これはひとりイギリスのみに認められた事実ではなく、自由・平等を旧支配者に要求して独立したアメリカにあってさえ、民主主義は「巨大な野獸」と恐れられた。民主主義がアメリカで公式に体制側のなかで「民主主義のための戦争」と位置づけられた時が最初といわれている。

一七七六年アメリカの独立宣言、一七八九年
フランスの人権宣言、そして近くは一九四八年
の世界人権宣言に見られるごとく、民主主義、
したがつて自由や平等や人権の要求はその一つ
の性格を、被庄政者、庄政者への闘争の成果と
してからとられつある彼らの庄政者に対する
過渡的な要求としてとらえられねばならない。
民主主義のこの面は帝国主義本国人民のもので
はなく、第三世界人民の要求として、階級闘争
の現代の重要な要求としてとらえられねばならぬ。

ない。しかし他方には「自由」や「平等」や「人権」を包含するこの「民主主義」が、第三世界人民の闘争が階級闘争に発展することを抑止するイデオロギー、資本主義の世界支配を世界人民の目からカムフラージュするための政治の中的な方策であること、また現にそうなっていることを見落とすわけにはいかない。

ブルジョアジーが彼らの民主主義を自賛して掲げる普通選挙制についてマルクスはこういつている。「普通選挙権は、支配階級のどの成員が議会で人民を代表し、ふみにじるべきかを三年または六年に一度決める」と。あらゆる方策をもっての、しかし総括して、富と投票の野合であるこの普通選挙制と議会制は「資本主義がもっとも順調に発展する条件がある場合にはこの社会には民主共和制という形で、程度の差はある完全な民主主義がある。しかしこの民主主義は、つねに資本主義的搾取という狭い枠で、實際には、つねに少数者のための、有産階級だけのための、富者だけのための民主主義にとどまっている」（レーニン）ところのブルジョア民主主義である。

続いて民主主義の他の主要な内容である平等と自由についての検討に入る。平等も自由もブルジョアジーの発明ではない。先の「一海賊の宣言」を見るまでもなく、人間の歴史を通して、長い被抑圧者の階級闘争の成果として、平等も自由も被抑圧人民の希求であった。われわれの祖先は昔、われわれ自身のうえに存在して長い被抑圧者の階級闘争の成果として、平等と自由は要求へと高められ、自然法の理念で武装され、一步一步たたかいとられてきた。自由はまた今日支配権をもつブルジョアジーによる旧支配階級への闘争の主要な要求でもあった。

自由の消極的側面は、身体の自由、思想・信条・宗教などの精神面での自由、そして居住移転や職業の自由など、ブルジョアジーの資本主義活動の自由を基礎に、多くの資本主義国の法的精神に固定されている。しかしこの自由は同時に、私有財産制の不可侵、国家の不可侵によって統制されているものであり、積極的・根源的な自由権を承認するものではないことは論をまたない。今日世界上に存在する自由は、その大部分は資本主義活動の自由のための自由である。安定した豊かな資本主義国にあっては、その自由は、あたかもブルジョアジーの自由のみではなく、政治的表現の自由など、大衆の自由を形式上認めている。しかしそれはブルジョアジーによる階級独裁が、一定の物質的・政治的条件のもとで階級対立を緩和させるために機能する自由であり、反乱の自由では決してありえない。人類が國家を必要としているかぎりにおいて、一階級の自由以外に全人民の自由はまたありえない。

これもまた第三世界人民にいま与えられている自由を見る時、ただちに承認できることである。ブルジョアジーとその帝国主義国家が世界人権宣言でいう「恐怖と欠乏からの自由」の内実として与えられるものは、自由と民主主義への反乱者として処刑される自由、失業と餓死の自由である。

平等もまたそうである。ブルジョアジーの民主主義のスローガンのなかで最も弱々しく、ある時は大声ではなく、つぶやきですませておきたいこの平等のスローガンが、もし理論上可能であるように、この資本主義社会で完全に実施されたら、資本主義とその国家はただちに崩壊するであろう。政治決定の完全な平等が行われるならば、消費財の完全な平等分配がもし行われるなら、それはどうして生産手段の所有の平等だけを例外とすることができるだろうか。資本主義国家での平等は、結局ブルジョアジーとその富によってコントロールされうるかぎりの議会選挙への一票の平等以外、何ものも意味しないのだ。

ではプロレタリアートの国家にあって、プロ独立社会にあって民主主義は不要なのか。またプロ独立の民主主義はブルジョア民主主義の限界を乗りこえうるものか。

プロレタリアートの独裁はプロレタリアートの民主主義である。それは第一に、ブルジョアジーの民主主義、形式上の民主主義を徹底しておし進める民主主義である。プロ独立にあってプロレタリアートは、消費財、生活資材の分配を平等にするなどをまず要求する。それはしたがって生産手段を私人から社会全体の所有にする階級闘争の進展の度合と結合して、革命の進展の結果として実現される。分配の平等は戦時共産主義のなかでその出発をみ、プロ独立の段階、社会主義建設期のプロ独立でその「完成」を見ることができる。しかしその段階の平等もまた不平等である。なぜなら社会主義建設期の平等は、「働くもの食うべからず」の原則のものでの平等であり、他人の労働を搾取して生きる階級を除外しての平等— 少数者のではなく多数者の平等、勤労階級の平等だからである。さらに社会主義建設期のプロ独立はプロレタリアートの平等と権利を共産主義にまで止揚する階級闘争でなければならない。レーニンはマルクスのことばを用いてこう説明している。「ここには事実、平等な権利はあるにはあるが、しかしこれはまだブルジョア的権利であって、他のあらゆる権利と同じように不平等を前提としている。すべて権利とは、実際に等しくなく、たがいに平等でない異なった人間に等しい尺度をあてはめることである」「(社会主義社会では)『働くもの食うべからず』この社会主義的原則はすでに実現されている。『等しい量の労働に等しい量の生産物を』この社会主義的原則もまたすでに実現されている。けれどもこれは原則はすでに実現されている。『等しい量の労

まだ共産主義ではない。そしてこれはまだ不平等な人間の、不平等な量の労働に對して等しい量の生産物を与える『ブルジョア的権利』を除去するものではない」と。

全世界のすみずみにまで生活手段が十分にゆきわたり、社会から生活手段の争奪の根拠がなくなり、全世界の圧倒的多数の人間が資本主義的権利とその欲望から自由になり、各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて得るようになるまでプロレタリアートの民主主義はその任を終えることはできず、プロレタリアートの独裁は最初はその「権利と平等」を厳格に執行する国家権力として、やがてその任を軽減し、眠り込んでいくまで、その力の行使を終えることはできない。

社会主义建設期のプロ独はプロレタリアートの民主主義である。ブルジョアジーの手から生産手段を奪取し、新しい国家とその権力を樹立したのちプロレタリアートの独裁は、民主主義を徹底しておし進める階級闘争である。

この階級闘争はプロレタリアートが世界革命へと展開するための道具としての国家、プロレタリアートの民主主義を実現する機関としての国家の建設をおし進める。それはブルジョア議会制にもとづいた国家ではありえない。しかしそれは代議制と選挙制を廃棄するものでもない。むしろ代議制と選挙制の欠陥とブルジョア的欺まん性を打破し、民主主義を徹底するものである。現代社会にあっては実際に人民の直接民主制は不可能であり、間接民主制を代議制としてとる他はない。この欠陥はブルジョア共和制にあっては最大限利用され、人民は实际上中央国家政治とは切斷される。プロレタリアートもまた強力な中央権力を不可欠とするが、それは日々の労働現場に基本単位をおき、階級闘争の日々の団結体であり日々の政治権力であるソビエトの最小単位に責任を負う代議員によって構成された中央ソビエトでなければならない。中央権力の活動は最小単位のソビエトに公開され、その点検を受けるものでなければならない。中央権力はまた官僚化を防ぐ自動的装置をもち、中央権力内における討議と決定の執行をうながし促進する健康な装置をもたねばならない。これはその原初においてパリ・コミューン四原則が掲げたプロレタリアートの民主主義であり、スターリンによるソビエトの破壊とそれに代わるターリンによるソビエトの破壊とそれに代わるスターリン主義国家の反プロレタリア民主主義への批判が導きだすものである。この目的のために、プロレタリアートの民主主義は次の方策をとるであろう。最小単位ソビエトにおける直接民主制、秘密一票投票、公務員の官僚化を防止する要としての「賃金の一般労働者並みへの引下げ」、そして全公務員と全代議員におよぶ簡便で迅速なコール制。

さらにブルジョア共和制下で発達した三権分立と複数政党について検討しなければならぬ



兵士の前で演説するレーニン

レーニン主義を復権せよ

い。複数政党についてすでにレーニンによる革命戦争時のプロ独の項でふれたが、レーニンとボリシェビキは一党制を原則としたことはなく、そう主張したこともない。革命戦争下の階級闘争が革命と社会主義に動搖する党派を駆逐したのである。したがって複数政党を大衆が要求するかどうかは情勢に応じ、階級闘争の状況に応じ、党派の綱領と路線に関わる。ただ一般的に長期に続くであろう革命の持久対峙下では複数政党の発生は避けられず、社会主義と階級闘争にとってこれを恐れる根拠はない。なぜならこの状況下では革命と社会主義のための戦術は、革命戦争下のそれに比べ多様な選択肢があり、一戦術の重要性より、この選択と執行と総括への大衆の参加の実現が重要視されるからである。三権分立については、パリ・コミューンもソビエトも同じく「ブルジョア議会制のおしゃべり小屋」と決別し、「同時に立法府でもあり執行府でもある行動的権力」を求めていた。これはまったく正しいといえる。同時に革命は、プロレタリアートの階級闘争とその団結体が常時この権力のあやまちを点検し批判する特別の装置を見つけだすであろうし、またそうしなければならないことを階級の経験は教えている。

これらすべてはプロ独の民主主義の方策である。それは動搖する小ブルジョアジーがいうような、ブルジョア民主主義を基礎にするあれやこれやの改良の方策ではない。彼らはブルジョア民主主義がブルジョアジーによる独裁の枠を決して出るものでないことを知らない。革命に勝利したプロレタリアートの民主主義もまた、プロレタリアートの独裁の民主主義であり、全世界の革命の勝利までその闘争の旗を降ろすことはできない。その旗はプロレタリアートの「全人民の民主主義」ではない。それは世界に階級が存在するかぎり決して成立しないものだからである。プロレタリアートの独裁の民主主

義が全人民の民主主義へと発展する時、それは国家がその存在理由を失い、眠り込み死滅する時である。それはまた民主主義が、その名をもつて闘争する根拠がなくなり、眠り込み死滅する時もある。

われわれがあえてこの方策を掲げるには、ただ一つの理由にもとづく。ソビエトにおけるプロレタリアートの独裁、プロレタリアートの民主主義はスターリン主義によって破壊された。その結果は、ソビエトにおける階級闘争のいつたんの消滅であった。ロシア革命を成功させ、共産主義世界の建設を理想として掲げ、革命戦争を耐え切った階級闘争は、スターリンによる社会主義の放棄と弾圧のなかでも、ナチスの侵略戦争を打倒し、激しい労働をもつて帝国主義諸国をはるかに越える生産をなし切るまで死に絶えはしなかった。それはボリシェビキ党が破壊されて、はるかの後まで再生産されることのないままに生き続けた。

社会主義建設の根源はプロレタリアートの階級闘争であり、そのエネルギーである。プロレタリアートの独裁とは、社会主義世界を希求するプロレタリアートの階級闘争である。プロレタリアートの独裁の前衛党の任務は、この階級闘争を発展させ、プロレタリアートを国家の統治者へ、社会主義の建設者へと領導することにある。だからプロレタリアートの民主主義はプロレタリア大衆が自己的のプロ独国家の統治者へと前進する方策でなければならぬ。

資本主義が存在するかぎり階級闘争は発生する。そしてその階級闘争は自らの国家を建設し、全世界の革命の勝利までその闘争の旗を降ろすことはできない。その旗はプロレタリアートの独裁である。

1月

ブッシュ来日 阻止闘争に立ちむけた

日米安保の侵略的再編と闘おう

米大統領ブッシュの来日が一月七日になると決定された。ブッシュは

一二月末からオーストラリア、シンガポール、韓国を歴訪した後に来日し、日本では天皇との会見や日米首脳会談などが予定されている。

今回のブッシュ来日の目的は、世界の基軸帝國主義として決定的な位置をもつ日米両国が、世界支配再編にむけた帝國主義国間の新たな協力関係を確立していくことである。

今回の日米首脳会談では、「地球的大規模での協力のための日米盟約」東京宣言では、「新たな協力計画」を発表するとしている。日米帝はブッシュ来日を通じて二国間矛盾の激化を回避しつつ、共同して新たな帝国主義的支配秩序を作りあげようとしている。日米帝は、ソ連・東欧の全面的な資本主義化の促進と、第三世界諸国における反帝

「東京宣言」の発表が予定されている。

「東京宣言」では、新たな日米関係を①「国際関係」②「アジア・太平洋安全保障」③「世界規模の三つのレベルで構想する」とされている。同時に日米帝は、日米二国間での経済摩擦などを調整を目的とした短期的な「行動計画」を発表するとしている。

日米帝はブッシュ来日を通じて二国間矛盾の激化を回避しつつ、共同して新たな帝国主義的支配秩序を作りあげようとしている。日米帝は、ソ連・東欧の全面的な資本主義化の促進と、第三世界諸国における反帝

12・25 18

基地の島 反PKO闘争

●おわびと訂正

止したとしても、日帝が手を変えてこの攻撃を打ち下ろしてくることは明らかである。アジア・第三世界人民との結合を強め、日帝の侵略反革命戦争出動とたたかい抜く国際反帝統一戦線の構築こそが問われている。

十一月二七日の衆院特別委員会での自民・公明党によるPKO法案の強行採決以来、沖縄においても急速に自衛隊の海外派兵に反対する危機意識が高まってきた。連合沖縄は言うまでもなく、県労協センターや社会全覚などがなかなかたたかいを組織しない中で、十一月に入つてから様々な枠での反PKO闘争が取り組まれた。

十一月二日、自治労、高教組、マスコミ労協、憲法普及協会、人権協会による五者の共同主催で、那覇市の自治会館に二百人の先進的労働者を結集してPKO阻止集会がたかに取られた。四日には沖縄組が独自に集会を開催し、また女性グループや文化人グループなどもそれぞれがPKOに反対する意志表示をおこなった。

八日には、一坪反戦地主会を中心



「PKO法案」に反対する市民連絡会のデモ(12月8日)

『烽火』四三七号四ページ掲載の集会報告記事に誤りがありました。「在日韓国青年連合の孫さん」の部分を「在日韓国青年連合の年連合の宋さん」に、おわびし訂正いたします。

『烽火』四三七号四ページ掲

載の集会報告記事に誤りがありました。「在日韓国青年連合の孫さん」の部分を「在日韓国青年連合の宋さん」に、おわびし訂正いたします。

このように十一月に入つてから諸団体の反PKOの独自取り組みが相次ぐなか、これらに押されて社会党中央委員会を構成し、十八日与儀公園でPKO法案阻止県民総決起大会を開催した。

PKO法案は、再びアジア軍事侵略へ突き進もうとしている日帝の歴史的大攻撃である。自衛隊の海外派兵を全力で粉碎せねばならない。例え今国会においてPKO法案を阻

急速に進行しているのである。

他方、ブッシュ来日の目的の重要な一つに、日本に対する「市場開放」要求があることをとらえて、日米帝國主義間の矛盾・対立のみに目を奪われている見方もある。たしかにブッシュは、本年一二月の米大統領選挙にむけて、一向に好転しない国内経済の衰退を食い止めるに必死であり、日本に対する「市場開放」の要求は譲れない。

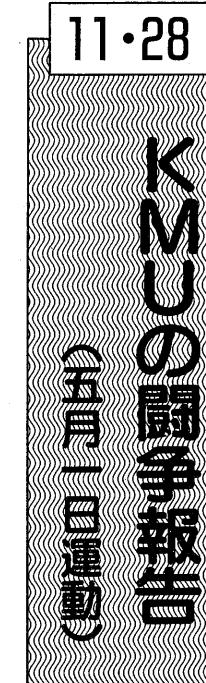
だが当面、日米帝國主義は、二国間矛盾の激化を緩和しながら、緊密な帝国主義間同盟を作り上げ、アジア・第三世界の反帝國主義闘争と社会主義勢力の包围と解体を進めようとしているのである。

現在、「冷戦」の崩壊に対応して日米軍事同盟の存在価値が薄れていかかるごとき見方が一部に見られる。だが、これはまったく誤っており、実践的にはきわめて危険な傾向である。実事は、アジア・太平洋における「地域紛争」に対応した日米軍事同盟の再編と強化が進んでいることを示している。また、日米軍事同盟を軸に、韓国を巻き込んだ日米韓軍事体制の強化が、核検査問題など朝鮮民主主義人民共和国の包囲として、第三世界人民の反帝國主義・社会主義革命運動への連帯戦として、総力を反対の声をあげなければならぬ。「ブッシュ来日阻止・アジア・第三世界人民の反帝國主義・社会主義革命の解体を狙う日米軍事同盟の再編・強化反対!」をかかげ、九二年の幕開けをブッシュ来日阻止闘争で迎えよう!

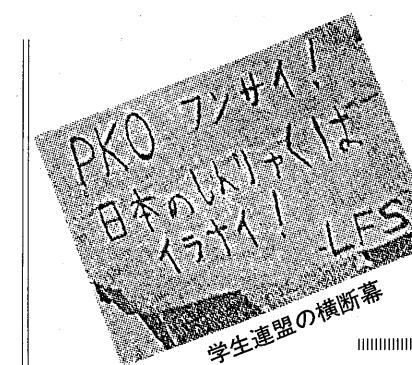
私たちのピケット行動で私たちのは、戦闘的なフィリピン学生同盟(LFS)のメンバーが同じ問題で日本大使館に抗議行動を行いました。また昨日二七日に「民衆の世界的交流」(PGE)などが参加しました。また昨日二七日に本人民に日本の軍事力の再興に反対する日本人民の闘争を支持し、PK

KMUを始めとする諸民主団体は本日PKO法案反対、日本軍国主義の廃止の意思表示をするために、日本大使館前でピケット行動を行いました。

ピケットにはバヤン(新民族主義者同盟)、民衆の発展のためのアジア太平洋フォーラム(APFPPD)、「民衆の世界的交流」(PGE)などが参加しました。また昨日二七日には、戦闘的なフィリピン学生同盟(LFS)のメンバーが同じ問題で日本大使館に抗議行動を行いました。これに先立つて私たちのピケット行動で私たちのは日本人民に日本の軍事力の再興に反対する日本人民の闘争を支持し、PK



KMUの闘争報告 (五) 平日運動



PKO法案は平和を求める世界の人々の活動に敵対するものです。それは実際には「平和維持活動」どころか、長年にわたって存続してきた大國による諸民族支配のシステムを永続化させようとするものです。ブッシュの「世界新秩序」の名目のもと

PKO法案を要求する声明を読み上げ、配付しました。同様のプラカードや旗をかけました。ピケット行動を見ていた民衆からも支持の声があがりました。

大使館の福島労働担当員が抗議行動を見るために階下に下りてきたので、私たちは宮沢首相および国会あての抗議文をわざしました。多くの代表的な日本のマスコミが私たちの行動を取材し、またCNNやフィリピンのマスコミもピケットの取材撮影を行いました。これに先立つて私たちの声明をフィリピンの新聞社に送付し、掲載の手はずをしておきました。

PKO法案に反対する日本人民の闘い万歳! 正義と主権による世界平和を求めるすべての人民の解放闘争がんばってください。

私たちには、ふたたび日本人民が広島・長崎の悪夢を経験しないためにも、日本政府にこのような帝国主義の侵略的戦略への参加をとりやめるよう訴えます。日本政府はすでに、湾岸戦争に資金を注ぎ込むことによって、危険なPKO法案の通過を全効果ではかるとしていること、衆議院では人民の反対を押し切って、法案がすでに承認されたということを知っています。しかし闘いはいまだ終わっておりません。KMUは引き続いて日本人民とともにアジア・第三世界への日本の再侵略を許さない闘いを続けます。

私たちはフィリピンで署名運動を行い、これからも日本大使館に抗議行動等々を行っていく予定です。KMUは日本の労働者がPKO反対闘争の先頭に立って闘っていることに敬意を表します。フィリピンでも同時に平行的な行動を行いたいと思いま

すので、引き続き情報交換とあなた

の行動予定をお知らせください。

たちは声明をフィリピンの新聞社に

送付し、掲載の手はずをしておきました。

ともに闘いましょう。

フィリピンで(資料)

派兵反対の声

11月18日

BAYAN
(新民族主義者同盟)



「自衛隊」は防衛や自衛のためのものではありません。軍隊の海外派兵は侵略行為であって、けつして自衛行為ではないからです。他国領土への軍隊配備の恒常化は戦争を不可避のものとして合法化し、最終的には国民の防衛ではなく戦争をもたらすのです。

さらに、軍隊の海外派兵は諸民族の主権に対する重大な犯罪行為です。それは領土権の侵害であり、派兵先の国々の人民の自決権を阻害する直接的かつ強力な脅威です。

私たちには、いまだ広島・長崎の悪夢を心にとどめながら解放された平和な世界を求めて闘う日本人民とともに進みます。私たちは、日米の経済支配を維持するための「世界秩序」を拒否します。そして、日本が米国とともに世界を軍事的に支配することを望まず、これに反対して闘っています。

私たちには、ふたたび日本人民が広島・長崎の悪夢を経験しないためにも、日本政府にこのような帝国主義の侵略的戦略への参加をとりやめるよう訴えます。日本政府はすでに、湾岸戦争に資金を注ぎ込むことによって、危険なPKO法案の通過を全効果ではかるとしていること、衆議院では人民の反対を押し切って、法案がすでに承認されたということを知っています。しかし闘いはいまだ終わっておりません。KMUは引き続いて日本人民とともにアジア・第三世界への日本の再侵略を許さない闘いを続けます。

私たちはフィリピンで署名運動を行い、これからも日本大使館に抗議行動等々を行っていく予定です。KMUは日本の労働者がPKO反対闘争の先頭に立って闘っていることに敬意を表します。フィリピンでも同時に平行的な行動を行いたいと思いま

すので、引き続き情報交換とあなた

の行動予定をお知らせください。

たちは声明をフィリピンの新聞社に

送付し、掲載の手はずをしておきました。

ともに闘いましょう。

じりました。「PKO法案」を通過させようとする日本政府の動きは、この願いをさらに暴力的に押しつぶすものです。

「自衛隊」は防衛や自衛のためのものではありません。軍隊の海外派兵は侵略行為であって、けつして自衛行為ではないからです。他国領土への軍隊配備の恒常化は戦争を不可避のものとして合法化し、最終的には国民の防衛ではなく戦争をもたらすのです。

さらに、軍隊の海外派兵は諸民族の主権に対する重大な犯罪行為です。それは領土権の侵害であり、派兵先の国々の人民の自決権を阻害する直接的かつ強力な脅威です。

私たちには、いまだ広島・長崎の悪夢を心にとどめながら解放された平和な世界を求めて闘う日本人民とともに進みます。私たちは、日米の経済支配を維持するための「世界秩序」を拒否します。そして、日本が米国とともに世界を軍事的に支配することを望まず、これに反対して闘っています。

私たちには、ふたたび日本人民が広島・長崎の悪夢を経験しないためにも、日本政府にこのような帝国主義の侵略的戦略への参加をとりやめるよう訴えます。日本政府はすでに、湾岸戦争に資金を注ぎ込むことによって、危険なPKO法案の通過を全効果ではかるとしていること、衆議院では人民の反対を押し切って、法案がすでに承認されたということを知っています。しかし闘いはいまだ終わっておりません。KMUは引き続いて日本人民とともにアジア・第三世界への日本の再侵略を許さない闘いを続けます。

私たちはフィリピンで署名運動を行い、これからも日本大使館に抗議行動等々を行っていく予定です。KMUは日本の労働者がPKO反対闘争の先頭に立って闘っていることに敬意を表します。フィリピンでも同時に平行的な行動を行いたいと思いま

すので、引き続き情報交換とあなた

の行動予定をお知らせください。

たちは声明をフィリピンの新聞社に

送付し、掲載の手はずをしておきました。

ともに闘いましょう。

反カラバールンシで抗議行動

フィリピン、ルソン島南部の南タガログ地方では現在、「カラバルソン計画」という曰大な開発計画が進行している。この計画には日本のODAが供与され、丸紅、三菱商事などの商社が深く関わっている。二月九日、JPM90'sと来日中のSTAGE NDA（南部タガログ一真のオールタナティブな発展のための連合）のエドアルド・モラさんらは国際協力事業団（JICA）関西支部と丸紅本社への抗議申し入れ行動をおこなった。



JCIA関西支部前での JPM90sの抗議行動

カラバルソン計画はマニラに隣接する南タガログ地方の五つの州における、港湾・高速道・工業支援・都市開発など二九件の計画からなる一大開発計画である。

スター・プランを全文読んできたのか」と言うなど、権力の先兵としての対応に終始した。代表団は計画の撤回を申し入れた。

国際協力事業団（JICA）がこの計画を推進し、九一年一〇月に最終マスター・プランを公表した。すでに日本の資本はこの計画の中心となる輸出加工区の開発と加工区への進出をすすめている。カビテ輸出加工区では操業三九社中、日本資本が一六社。造成中のファーストキャビテ工業団地は丸紅によって、ラグナテクノパークは三菱商事によつてですすめられている。

モラさんとともに丸紅本社、JIC
AGENDA事務局長のエドアルド・

一九九一年一〇月のJICAのカラバルソン計画に関するマスター・プランの撤回を申し入れる。マスター・プランは南タガログ人民の批判にこたえるものとなつていい。第一に、輸出加工区・工業団地建設予定地に、同計画は南タガログ地域で進行する環境破壊を解消することはできず、より深刻な環境破壊を進めることが予測される。第四に、マスター・プランでは二〇一〇年までに公的資金だけでも三一億一一〇〇万ドルを投

の州政府は外国からの投資を促すため、「ノーストライキ、ノーニュニオン政策」を表明しているように、南タガログ地域の労働組合の結成や労働地域への弾圧が引き起こされることは確実。第一に、農地の工業団地への転用と農漁民のたたきだしが避けられない。第三なっていくことは必ずしも南タガログ人民への人権侵害であり暴力的抑圧がいつそう激しくなることになつてゐる。

JICAへの抗議文（要旨）

JICAへの
抗議文（要旨）

とになつており、ほとんどを外国かの債務依存、破綻をまの推進によの人権侵害を激しく

抗議する。
およびこ
れらの事
業の中止
を申し入れる。ファーストキャ
ビテ工業団地の建設に関しては
農地の工業用地への転用に対し
て農地改革省からの異議が出さ
れたにもかかわらず、農地から
一八〇世帯の農家を追い出し造
成に着工した。カラカ火力発電

丸紅本社への 抗議文（要旨）

抗議する。
およびこ
れらの事
業の中止
を申し入れる。ファーストキャ
ビテ工業団地の建設に関しては
農地の工業用地への転用に対し
て農地改革省からの異議が出さ
れたにもかかわらず、農地から
一八〇世帯の農家を追い出し造
成に着工した。カラカ火力発電

社への
要ヒヨ

12・9 大阪

A 関西支部に対する抗議行動をおこなつた。午後三時三〇分から開会式